

世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」

北海道の ガイド教本



2022
北海道環境生活部

世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」

北海道のガイド教本

はじめに

2021年7月「北海道・北東北の縄文遺跡群」が、ユネスコの世界文化遺産に登録されました。この取組は青森県を事務局とし、北海道、岩手県、秋田県の4道県と資産を有する市町が2007年から推進してきたものであり、その積み重ねが皆様のご支援のもと、ここに実ることとなりました。

縄文時代の人々は、厳しくも豊かな自然のなかで、採集・漁労・狩猟を生活の糧として、1万年以上もその暮らしと文化を存続させてきました。その痕跡である縄文遺跡群は、歴史的な価値はもとより、持続可能な社会の実現が求められている現在において、縄文時代の自然に対する向き合い方や命ある全てを尊ぶ心など、私たちに貴重な示唆を与えてくれることでしょう。

世界文化遺産登録を機に、今後は多くの見学者が来訪し、縄文の価値に触れて驚いたり、共感したり、いろいろな気づきを得てゆくものと思います。そのためには、縄文遺跡という地下に保存されている文化財の価値、シリアル・プロパティーズという複数の資産で一つのストーリーを語る本資産の特性を十分に理解しながら、的確にガイドすることが必要となります。

本冊子では、世界遺産の意義や縄文時代の概要をはじめ、世界文化遺産になった縄文遺跡群のストーリー、および北海道の資産についてコンパクトにまとめています。また、ガイドで参考にしていただきたいポイントも掲載しています。

ガイドの皆様をはじめ「北海道・北東北の縄文遺跡群」に関わる多くの方々、このストーリーを広く発信する主役となります。これから世界中の人々をお迎えするときに、本冊子を役立てていただくと幸いです。

目次	
はじめに	1
世界遺産—人類共通の財産—	2
縄文時代の概要	6
「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産としての価値	12
北海道・北東北の縄文遺跡群の位置	18
北海道の構成資産・関連資産	19
垣ノ島遺跡	20
北黄金貝塚	24
大船遺跡	28
入江貝塚	32
高砂貝塚	36
キウス周堤墓群	40
関連資産 鷲ノ木遺跡	44
北東北の構成資産・関連資産	48
世界遺産をガイドするために	50
縄文遺跡群の保全について	55
縄文遺跡群を守り、活用するために	56
縄文時代以降の北海道の歴史	58
専門用語解説	60
各遺跡へのアクセス	62
北海道の見学可能な縄文遺跡	63

世界遺産 — 人類共通の財産 —

世界遺産は、一つの国だけにとどまらず、世界の人々が共有し、未来の世代に引き継いでいくべき貴重な財産です。世界遺産について、基本的なポイントを見てみましょう。

世界遺産とは

世界遺産とは、「顕著な普遍的価値 (OUV)」を有する未来の世代に引き継いでいくべき人類共通の財産として、1972年のユネスコ総会で採択された「世界遺産条約」に基づく世界遺産一覧表に登録された資産のことです。

世界遺産条約の目的は、人類全体にとって価値のある遺産を損傷・破壊などの脅威から保護し、保存するために、国際的な協力・援助の体制を確立することにあります。

世界最初の世界遺産は、1978年に登録されたイエローストーン国立公園やガラパゴス諸島、ゴレ島などの12件です。



アメリカ合衆国：イエローストーン国立公園

顕著な普遍的価値 (OUV / Outstanding Universal Value)

国家間の境界を超越し、人類全体にとって、現代だけでなく将来世代に共通した重要性をもつような、傑出した文化的な意義や自然的な価値のことです。その評価基準には、10の項目があります (p4 参照)。

→北海道・北東北の縄文遺跡群の OUV については、p12 をご覧ください。

ユネスコ

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization 略称：UNESCO (国際連合教育科学文化機関)。教育・科学・文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とする国連の専門機関です。

世界遺産条約

正式名称は「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)。1972年のユネスコ総会で採択された国際条約です。文化と自然という両面の分野を同じ条約で保護する点に特徴があるとされています。2021年8月現在194カ国が締結しており、さまざまな世界条約の中で最も多くの国が協調し、取り組んでいる国際条約となっています。日本は、1992年に125番目の締結国となりました。

世界遺産条約の成立

世界遺産条約の成立は、1960年にエジプトのナイル川で始まったアスワン・ハイ・ダム建設によって水没の危機に直面したアブ・シンベル神殿の救出プロジェクトが契機となっています。この危機に際し、ユネスコは世界に協力を呼びかけ、約50カ国の支援によって神殿を移築し、保護しました。

このプロジェクトはスエズ運河の領有権を巡るエジプトとイスラエル・イギリス・フランスによる第二次中東戦争 (1956年～57年)の直後に実施されました。その後1966年に世界遺産条約が起草され、1972年に採択されました。そのため、世界遺産条約には、文化の多様性を各国が認め合うことにより、国際社会の平和に貢献するという意志が込められています。



エジプト・アラブ共和国：アブ・シンベル神殿 (ヌビア遺跡)

世界遺産の種類と傾向

世界遺産には、「文化遺産」「自然遺産」「複合遺産」の3種類があります。2021年7月現在、世界遺産は1154件 (文化遺産 897、自然遺産 218、複合遺産 39) にのぼります。そのうち日本からは25件 (文化遺産 20件、自然遺産 5件) が登録されています。

近年の文化遺産は、単体のわかりやすい資産だけでなく、複数の資産が総体としてOUVを表現するものが増えています。このような関連性のある資産群は、「シリアル・プロパティーズ (Serial Properties)」と呼ばれ、北海道・北東北の縄文遺跡群もこれにあたります。

文化遺産

記念物、建造物群、遺跡、文化的景観など



スペイン：アントニ・ガウディの作品群



エジプト・アラブ共和国：メンファイスとその墓地遺跡 - キーザからダハシユールまでのピラミッド地帯



日本：法隆寺地域の仏教建造物

自然遺産

地形や地質、生態系、絶滅のおそれのある動植物の生息・生育地など



イタリア共和国：ドロミューティ



ネパール：サガルマータ国立公園 (エベレスト)



日本：知床

複合遺産

文化遺産と自然遺産の両方の価値をもつもの



ペルー共和国：マチュ・ピチュの歴史保護区



中華人民共和国：峻頂山と泰山大仏



トルコ共和国：キョレメ自然公園とカッパドキアの岩窟群

世界遺産への登録

世界遺産に登録されるには、その資産が、世界的な視点から「顕著な普遍的価値」(OUV)を有していなければなりません。また、そのOUVについては、「世界遺産の評価基準」にあるi～xのいずれかの項目に該当していることが必要になります。

そのうえで、その資産がOUVを有すると見なされるためには、完全性(integrity)、真実性(authenticity)という要素を満たしていることが必要であり、かつ、その保護(protection)を確実にするための管理体制を整えていなければなりません。

- [1] 世界遺産の評価基準のいずれかに該当すること。 ※縄文遺跡群の場合はiiiとvに該当(詳しくはp12)。
- [2] 完全性(価値を表すものの全体が残っている)の条件を有していること。
- [3] 真実性(オリジナルの状態を維持している)の条件を有していること。
- [4] 将来にわたり保護するための管理体制があること。

世界遺産の評価基準

顕著な普遍的価値の証明には、「世界遺産条約履行のための作業指針」で示される以下10の基準のどれか1つ以上に合致する必要があります。このうち(i)～(vi)が文化遺産、(vii)～(x)が自然遺産、その両方で登録されたものが複合遺産となります。

- (i) 人類の創造的才能を表す傑作である。
- (ii) 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流、またはある文化圏内での価値観の交流を示すものである。
- (iii) 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統または文明の存在を伝承する物証として無二の存在(少なくとも希有な存在)である。
- (iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。
- (v) ある一つの文化(または複数の文化)を特徴づけるような伝統的居住形態、もしくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。または、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である(特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの)。
- (vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事(行事)、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある。
- (vii) 最上級の自然現象、または、類まれな自然美・美的価値を有する地域を包含する。
- (viii) 生命進化の記録や、地形形成における重要な進行情中の地質学的過程、あるいは重要な地形学的または自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である。
- (ix) 陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行情中の生態学的過程または生物学的過程を代表する顕著な見本である。
- (x) 学術上または保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種のある種の生息地など、生物多様性の生息地内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する。



完全性 (integrity)

世界遺産に登録されるすべての資産が満たさなければならない条件です。自然遺産、文化遺産とそれらの属性のすべてが損なわれることなく含まれる度合いを測るための指標です。完全性を評価する項目は、次の3つです。

- ・ OUVを表現するのに必要な要素がすべて含まれているか。
- ・ 資産の重要性を示す特質や背景を不足なく代表するために、適切な規模が確保されているか。
- ・ 開発や管理放棄による負の影響を受けているか。

真実性 (authenticity)

文化遺産が本来備えている価値を示すための指標で、文化遺産が満たさなければならない条件です。真実性は、以下を通じて資産の価値が表わされた場合に認められます。

- ・ 遺産そのものの文化的文脈において検討・判断されること
- ・ 資産の形状・意匠・材料・材質・用途・機能・伝統・技能・管理体制、所在地・周辺環境などの多様な属性

保護体制 (protection)

資産の保存管理には、顕著な普遍的価値及び完全性、または真実性の登録時の状態が、将来にわたって維持・強化されるように担保する必要があります。さらに資産を適切に保全するために、緩衝地帯(バッファゾーン)を設定する必要があります。

北海道・北東北の縄文遺跡群の登録までの流れ

世界遺産一覧表に登録される資産は、1年に一度、イコモスの報告に基づき、21カ国からなる世界遺産委員会で審議され、決定されます。

北海道・北東北の縄文遺跡群は、2007年12月に4道県(北海道・青森県・岩手県・秋田県)の知事が提案書を提出し、約14年後の2021年7月に世界遺産登録が決定しました。その間、地元ではボランティアガイドの皆さんを含め、多くの人々の協力によって合意形成が行われ、そのことも世界遺産委員会で高く評価された点となりました。



縄文時代の概要

縄文時代とは、約15000年前から約2400年前までに日本列島に展開した先史文化の時期にあたります。その大きな特徴は、採集・漁労・狩猟を生業としながら「定住生活」を実現し、発展、成熟させたことにあります。

旧石器時代から縄文時代へ

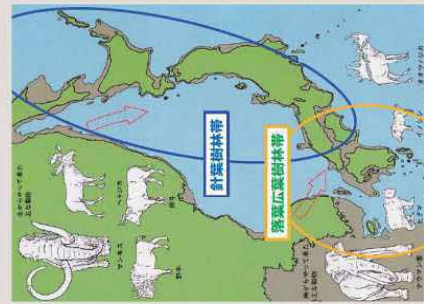
北海道における人類最古の痕跡は約3万年前のもので、縄文時代が始まる以前の旧石器時代に相当します。過去100万年の地球の歴史を見ると、10万年を卓越期として8万年の氷期（寒冷期）と2万年の間氷期（温暖期）を繰り返しています。旧石器時代の終わり頃（温暖期）にあたるため、米河の発達などによって海水面は現在より120mほど低下しており、北海道はアジア大陸と陸続きになったサハリンとつながっていました。

しかし、津軽海峡は深度が140m以上あるため、本州とは海で隔てられたままになっており、北海道は大陸北東部から突き出た半島の先端部になっていました。一方、対馬海峡はほぼ閉じていたため、日本海は大きな湖ようになっていました。寒冷で乾燥した気候により植生分布も現在とは異なり、南西部が常緑針葉樹林、北東部は落葉針葉樹林であったと推測されています。

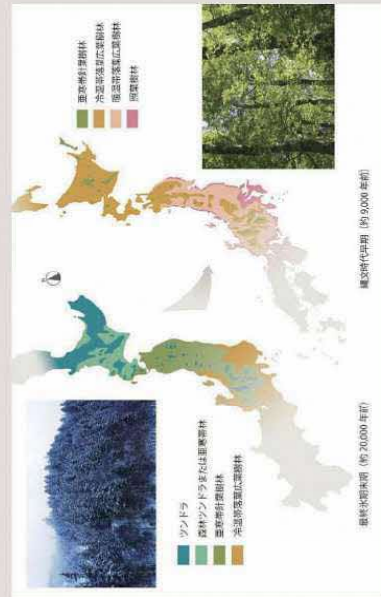
旧石器時代の人々は狩猟具を携えて、マンモスゾウやヘラジカ等の大型動物を追いかけながら移動生活をしていました。このころは周辺の自然から得られる食料資源が少なく、主な食料である大型動物が移動していったため、人も「移動生活」をしていたわけでは

約16000年前に温暖化が始まると徐々に海水面が上昇し、北海道は独立した島となります。九州と朝鮮半島の間にある対馬海峡が大きくなり、暖流の対馬海流が日本海に大量に流れ込んで北上し、北海道北端の宗谷海峡を通過してオホーツク海、北海道南端の津軽海峡を通過して太平洋へと流れ込みます。また、太平洋側には暖流の黒潮が北上しました。暖流で温潤生じた水蒸気が列島に雨や雪を降らせ、温暖で湿潤な気候に変化しました。これにより、山にはドングリ・クルミ等の堅果類が実り、川にはサケ・マスが遡上し、海にはアサリ・ハマグリ等の貝類やヒラメ・タラ等の魚類、イルカ・クジラ等の海獣類も生息するようになるなど、列島は生物多様性に富んだ環境になりました。

人々はこうした環境変化に徐々に適応し、食料を煮炊きする土器や小・中型動物を狩る弓矢などの狩猟具、釣針などの漁労具を使うようになり、「縄文時代」が開展開していききます。



旧石器時代の日本列島（北海道埋蔵文化財センター15周年誌に掲載の図）



旧石器から縄文の温暖化による環境変化（函館市縄文文化交流センター「ハネルより」）

縄文時代の特徴

縄文時代の最大の特徴は「定住生活」を実現したことにあります。今では当たり前の定住生活ですが、人類史的に見ると、獲物を追いつながら「移動生活」をしていた期間の方が圧倒的に長く、定住は人類史にとつての大きな転換点になります。また、世界的には、自然を開拓して農耕・牧畜を行い、食料を増産・備蓄できるようにしてから定住が開始するのです。縄文時代の定住は、採集・漁労・狩猟など自然の恵みにより定住を実現したところに他の先史文化にはない個性があります。

暮らし

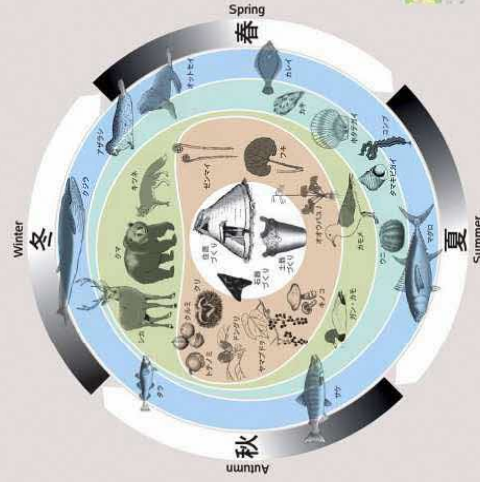
集落を存続させるためには、集落の人々が生活するために十分な食料を確保すること、その食料を加工・保存できるようにすること、骨や貝殻などの食料残渣、不要になった土器や石器などの道具類を廃棄する仕組みなどが必要でした。縄文時代の人々は、海、山、川といった周辺の自然を観察し、四季折々の恵みから巧みに食料を得ながら暮らしていました。また、フラスコ状土坑という木の実などの食料を保管する施設もつくっています。さらに、貝塚や盛土遺構と呼ばれる祭祀の要素を持った捨て場もつくられるようになります。

精神文化

精緻で複雑な精神文化があったことが遺構や遺物からわかります。墓は亡くなった先祖を追慕・崇敬する心の現れであり、死者には櫛や腕輪などの漆製品など豊富な副葬品が伴います。貝塚や盛土などの捨て場では、貝などの食料残渣の他に人骨、獣骨、意図的に破壊した土器や石器、土偶も出土しており、祭祀施設としての機能があったと考えられています。大きな礫を円礫状に並べた環状列石は、墓を伴うものや、象徴的な山や太陽の運行に関連すると推測されるものがあるなど、当時の世界観をうかがうことができます。

技術・交流

当時の人々は、漆製品やヒスイ製品の加工など、現代の伝統工芸にも通ずる高度な技術を持っていました。とくに、漆製品は約9000年前（垣ノ島B遺跡）という世界最古級のものもあります。また、天然のアスファルトを接着剤として使うなどの技術もありました。こうした漆、ヒスイ、アスファルトは津軽海峡を越えて北海道に入ってきたこともわかっています。一方、北海道からは石鏃・ナイフ等の素材となる黒曜石や石斧・ノミ等の素材となるアオトラ石が本州に渡っており、遠隔地との交流の様子がわかります。



四季による生業の様子を表す「縄文カレンダー」

ヒスイの流通

※赤い点はヒスイ出土遺跡を示す

生活のあり方と精神文化を示す遺構と遺物

[暮らし]

竪穴建物

定住を示す普遍的な構築物であり、居住を主な目的としています。地面を掘削した半地下式の構造で、内部に炉を持ちます。縄文遺跡群においては、ほぼ1万年以上継続して構築されました。時代や地域によって大きさまや形状などの違いがあります。屋根材は、茅などの植物のほか、土屋根もあります。

貝塚

太平洋側の内浦湾沿岸や汽水域では、貝塚が盛んにつくられました。貝塚内に埋葬人骨や大量の土器・石器が含まれることから、貝塚は単なる生活廃棄物の集積場所ではなく、祭祀・儀礼の場としての機能も有していたと考えられます。

土器

土器は人類が最初に獲得した加熱による化学変化を利用した画期的な容器であり、製作者のイメージどおりに自由に造形や装飾を表現できる可塑性を持った、芸術性豊かな土器も多数製作されるようになりました。また、土器の形態や文様は時代や地域性を顕著に反映するようになりました。

狩猟具

弓矢は、土器とともに縄文時代を代表する道具です。矢の先に取り付けられる石鏃は、この時代にもっとも大量に製作・消費された石器であり、弓矢を用いた中小型動物の狩猟が行われていたことがわかります。その他、獲物の解体や皮剥きを使うナイフやスクレーパーなどがあります。



竪穴建物(北黄金貝塚)



土器(大船遺跡)



貯蔵穴(大船遺跡)



石斧と石鉞(大船遺跡)



貝塚(北黄金貝塚)



狩猟具(大船遺跡ほか)



盛土遺構(垣ノ島遺跡)



漁具(回転式籠頭)(入江貝塚)

貯蔵穴

断面が袋状ないしはアラスコ状を呈する半地下式の土坑で、開口部の径が1m前後、深さが1~2m程度です。内部からトチなどの堅果類が確認されることがから、それらを貯蔵していたと推定されています。まれに人骨が発見されることから、墓に転用されることもあったと考えられます。

盛土遺構

大量の土器・石器をはじめ土偶や祭祀遺物、場合によっては生活廃棄物などを土砂で意図的に埋めて周辺より高く盛り上げた構造物です。土器・石器・骨角器などの道具類の他に、食物残渣などの有機質遺物が廃棄されることもあります。

石斧

集落のスペースを確保し、居住のための竪穴建物を築くなど、主に樹木を伐採するときに使う道具です。多くの石斧が折れた状態で出土しており、樹木を伐採する大変さが伝わってきます。石材はアオトラ石という緑色の石がよく利用されるのですが、これは北海道の沙流川から運ばれていることがわかっています。

漁具

動物骨や角から製作され、モリ・ヤス・釣針などが出土しています。釣針は、単式や組合せ式のものがあり、大きさまさまざまです。魚種によって使い分けていたことがわかります。石鏃は扁平な石の両端を打ち欠いて網の鏃としたもので、網漁も行われていたことがわかります。

[精神文化]

墓

土坑墓は楕円形や円形に地面を掘削し、中に遺体を埋葬する形態の墓です。埋葬方法は一般に屈葬が多く見られますが、縄文時代の後半には伸展葬も多くなります。また、共同墓地については、祖先崇拜を軸とした共同体の紐帯を強化する機能があったと考えられています。

土偶

土偶は、縄文時代を通じて出土するものも普遍的な祭祀具です。その明確な用途は明らかではありませんが、女性が表現している場合がほとんどであることから、人の出産や誕生と関連付けられ、自然の豊穡や再生を祈ったとも考えられています。

[技術・交流]

漆製品

赤漆と黒漆の塗布によって装飾された土器や櫛などが出土しています。極めて精巧な作りであり、当時の技術の高さを物語っています。なお、北海道にウルシノキは自生していないことから、ウルシ樹液もしくは製品を持ち込んだものと考えられます。

装身具

北海道に生息しないノシシの牙製品やオオツタノガイ製の腕輪などが出土しています。また、ヒスイを大珠や勾玉などに加工した装身具も出土しています。ヒスイ原石は、新潟県の姫川周辺にしか産出しないので、当時の交流を考えると重要です。

環状列石

大型の石を円形ないしは環状に配置した祭祀場で、共同墓地を伴うものもあります。環状列石には立地環境や石の配置の形態に違いが見られるほか、単独のものも複数のものがあります。周辺の集落が協働して構築し、維持・管理や祭祀を行い、集落間の紐帯を強めていたものと考えられています。

土製品・石製品

縄文時代の前半には、幼児の足を押しつけた足形付土板が墓から出土しています。また、後半にはキノコ形・スタンプ形・イカ形などさまざまな土製品が見られます。青竜刀形、刀剣形、棒状などの石製品も出土しており、祭祀具として想定されますが、具体の用途については不明です。



土坑墓(高砂貝塚)



環状列石(鷹ノ木遺跡)



土偶(高砂貝塚)



青竜刀形石器(大船遺跡)



漆塗り注口土器(垣ノ島遺跡)



イノシシ牙製装身具(入江貝塚)



ヒスイ製勾玉(鷹ノ木遺跡)

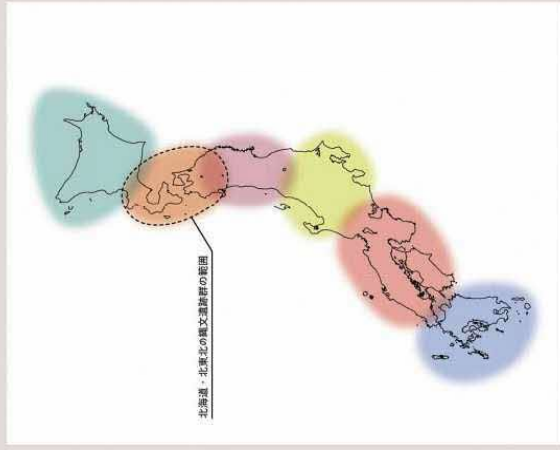
地域文化圏の形成

縄文時代の日本列島は、いくつもの文化圏に分かれていたことが知られています。6つ程度の核になる文化圏があり、それが時期により拡張・収縮していったのです。現在でも北海道、東北、関東、関西、九州、沖縄と地域性があるように、縄文時代には明確な地域文化圏があったようです。これを国学院大学名誉教授の小林達雄先生は「縄文のお厩柄」と呼んでいます。

縄文時代の文化圏の枠組みは、製作される土器の形状や文様といった様式や型式によって捉えることができます。また、居住施設である竪穴建物、墓制や環状列石などの共通性も認められ、生活のあり方や精神文化が共通していたことがわかっています。

これらの地域文化圏が形成された要因の一つに、自然環境の違いがあると考えられています。

日本列島は南北に細長く伸びているため、現在の森林組成は、北海道北東部から道央部に広がる針広混交林、道央部から本州北東部の冷温帯落葉広葉樹林（北方ブナ帯）、本州北部から本州中部の温帯落葉広葉樹林、本州中部から九州南部の常緑広葉樹林、九州南部から沖縄諸島の亜熱帯林が、それぞれ重なり合うように広がっています。

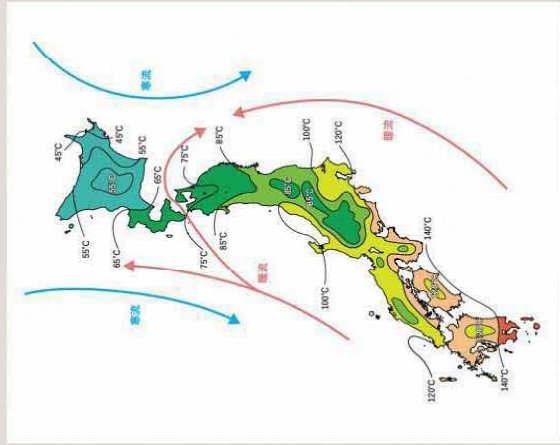


縄文時代の6つの地域文化圏

こうした森林層の違いは、南北に延びる列島の地理的な特徴が反映されたものです。これは、植物の生育には月平均気温で5℃以上が必要であることを基に算出した温度指数^{*}の分布にも現れています。大まかに見ると、15～45℃が針葉樹林、45～85℃が落葉広葉樹林、85～180℃が照葉樹林、180～240℃が亜熱帯林の分布範囲となっています。

森林層の違いは、高木だけでなく、そこに生息する動・植物相など生態系そのもの違いとなり得ます。集落周辺の自然から食料を得て暮らした当時の人々にとって、この生態系の違いが生活や文化のあり方に反映されたことは想像に難くありません。したがって、縄文時代の歴史や文化の流れを知るには、同一の自然環境や文化圏という枠組みで見ていくことが重要になります。

^{*} 1～12月の5℃を超える月の平均気温から、5℃を引いた値を合算して求めた数値



図中の温度は植物地理学に基づく温度指数(吉良竜夫1971年)

北海道・北東北の地域文化圏と共通性

津軽海峡の最短幅は下北半島の^{オホshima}大間崎と亀田半島の^{オホshima}汐首岬を結び18.7kmで、天気の良い日は海を隔てて双方を望むことができますが、北海道のヒグマと本州のツキノワグマ、北海道にはサルとイノシシがいないなど、「ブラキストン線」と呼ばれる生物生息域の境界になっています。しかし、縄文時代の人々はこの海峡を挟んで活発な交流を行っていました。

一方で、津軽海峡両岸の地域は冷温帯落葉広葉樹林（北方ブナ帯）に属し、縄文集落が営まれていた平野部にブナ林が広がるという共通の特徴がありまます。北方ブナ林帯では、コナラやミズナラなどのドングリに加えて、ブナの実を食べることができました。また、日本海沿岸では北上する対馬海流（暖流）と南下するリマン海流（寒流）、太平洋沿岸では黒潮（暖流）と親潮（寒流）が交差しており、サケ・マス等の寒流魚、マグロ・ブリ等の暖流魚の両方が回遊しています。

こうした南と北の生態系が混在している特徴も共通の地域文化圏を形成する背景になったでしょう。北海道南部と北東北には縄文時代を通して共通の地域文化圏が形成されていました。特に、5500年前頃から4500年前頃には、筒形の土器を使用したことに由来した「円筒土器文化」と呼ばれる地域文化圏が広がっていたことが知られており、生活のあり方や精神文化においても強い類似性が見られるようになりました。

生活道具の共通性

津軽海峡両岸の地域で作られた土器には、形や文様に強い共通性が認められます。縄文土器はそのデザイン性から自由に作られているように思われますが、地域や時期によって規則性が見うけられ、その集団に属している（アイデンティティ）という意味合いがあったと考えられています。

住まいの共通性

5000年前頃に津軽海峡両岸の地域に広がった「日ノ浜型住居」は、楕円形の竪穴に五角形の段構造を持つ特異な形態で、五角形の頂部には祭壇用と思われる付属施設が付くのが特徴となっています。こうした居住空間における祭壇施設の共通性は、生活だけでなく、精神的な活動も共通していたことの証しとなります。

大規模な祭祀の共通性

4000年前頃には、盛土遺構や環状列石など複数の集落が共同で営んだと考えられる大規模な祭祀場が造られます。盛土遺構は道具や食料残渣の廃棄に伴う祭祀の場として利用されてきました。環状列石は様々な形があり、葬送などと関係の深い施設と考えられています。こうした生産活動と直接結びつかない遺構が津軽海峡両岸の地域に分布することは、祭祀にも共通性があったことを示しています。



ハマナス遺跡（函館市）の、ベンチ状段構造を持つ 竪穴住居跡（手前は日ノ浜型住居）



北北海道西部の土器
1 早期:半野A式(函館中野丸遺跡) 2 前期:円筒土器下層式(函館市ハマナス野遺跡) 3 中期:円筒土器上層式(函館市白丸B遺跡) 4 後期:釜形式(函館市豊崎B遺跡) 5 晩期:日ノ浜式(函館市日ノ浜遺跡)
東北北部の土器
6 早期:物見台式(八戸市田面水平遺跡) 7 前期:円筒土器下層式(青森市三内丸山遺跡) 8 中期:円筒土器上層式(一戸市御所野遺跡) 9 後期:十層AV式(八戸市風張(1)遺跡) 10 晩期:亀ヶ岡式(南部町青龍長根遺跡)

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産としての価値

北海道・北東北の縄文遺跡群は、2021年7月27日の第44回ユネスコ世界遺産委員会拡大大会において以下の顕著な普遍的価値が認められ、世界遺産一覧表に登録されることが決まりました。

顕著な普遍的価値 (OUV)

北海道・北東北の縄文遺跡群は、北東アジアにおける世界的にも稀な長期間継続した採集・漁労・狩猟文化による定住の開始、発展、成熟の過程及び精神文化の発展をよく表しており、農耕文化以前における人類の生活のあり方と精緻で複雑な精神文化とを示す物証として顕著で普遍的な価値を持ちます。

評価基準への適合

10 ある評価基準 (p4) のうち、(iii) と (v) に適合しています。

評価基準 (iii)

現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統または文明の存在を伝承する物証として無二の存在 (少なくとも希有な存在) である。

北海道・北東北の縄文遺跡群は、1万年以上もの長期間継続した狩猟・漁労・採集を基盤とした、世界的にも稀な定住社会と、足形付土版、有名な遮光器土偶等の考古遺物や墓、捨て場、盛土、環状列石等の考古遺構で明らかのように、そこで育まれた精緻で複雑な精神文化を伝える類まれな物証です。

評価基準 (v)

ある一つの文化 (または複数の文化) を特徴づけるような伝統的居住形態、もしくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本、または、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である (特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまっているもの)。

北海道・北東北の縄文遺跡群は、定住の開始からその後の発展、最終的な成熟に至るまでの、集落の定住の在り方と土地利用の顕著な見本です。縄文人は農耕社会に見られるように土地を大きく改変することなく、変化に適応することで永続的な狩猟・漁労・採集の生活の在り方を維持しました。食料を安定的に確保するため、サケが遡上し、捕獲できざる河川の近くや汽水性の貝類を得やすい干潟近く、あるいはブナやクリの群生地など、集落の選地には多様な見本が見られました。それぞれの立地に応じて食料を獲得するための技術や道具類も発達しました。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値を示す4つの特徴

▶ 自然資源をうまく利用した生活のあり方を示すこと

森林資源や水産資源を持続的に管理・利用することによって、1年以上の長期間にわたって採集・漁労・狩猟による定住生活が営まれてきました。

▶ 祭祀・儀礼を通じた精緻で複雑な精神文化を示すこと

墓や貝塚・盛土、環状列石、土偶などは、祖先や自然を敬うこと、豊穡への祈りなど、人々の精神文化が醸成されました。

▶ 集落の立地と生業との関係が多様であること

食料を安定的に確保するため、山地、丘陵、内湾や湖沼の沿岸、河川付近など多様な環境に適応しながら集落を営み、技術や道具を発達させました。

▶ 集落形態の変遷を示すこと

1年以上継続した生活のなかで、気候変動・火山噴火などの環境変化や社会のあり方に応じて、集落の要素や構造が移り変わりました。

世界の先史文化との比較

世界遺産に登録されるためには、他に類似する遺産がないことを証明しなければなりません。北海道・北東北の縄文遺跡群は、世界の類似する先史時代の遺産と比較研究を行った結果、上記4つの特徴をすべて持つものが存在しないことが明らかとなっています。こうした比較研究により、縄文遺跡群が北東アジアにおいて、農耕開始以前に人類が長期間どのように生活していたかを示す代表的な見本であることが証明され、世界遺産登録につながりました。



アフリカのアルジェリアにある「タッシリ・ナジュール」は狩猟採集民による岩絵で、人々の生活や儀式的記録であり、集落や祭祀場を示す階級は含まれない。



マレーシアにある「レンゴン運合の考古学的遺産」は183万年～2300年前頃の石器加工場と洞窟群。1万年以上の完全な人骨や、旧石器から新石器、青銅器時代までの遺物が出土するが、居住の実態を示す証拠は認められない。

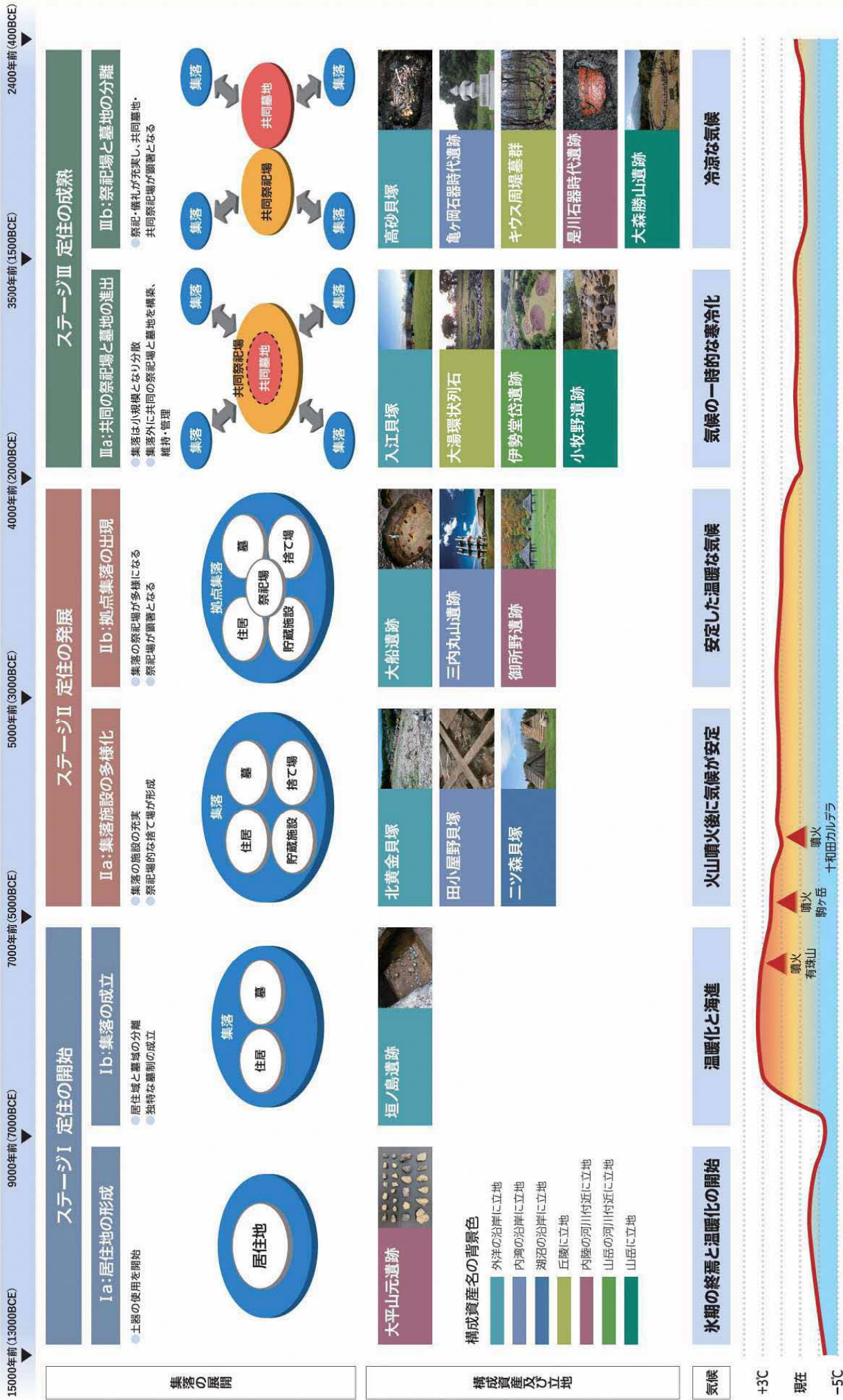


世界でも有名な先史時代の遺跡の一つ、イギリスの「ストーンヘンジ」は4500～4000年前の環状列石(ストーンサークル)で、農耕文化をもつ人々によってつくられたと考えられる。

定住の6つのステージ

北海道・北東北の縄文遺跡群では、「定住の開始・発展・成熟」の過程を6つのステージで説明しています。

※ BCE (Before Common Era) は、「紀元前」の意味です。なお、紀元後は CE (Common Era) と表記します。



※縄文時代の一般的な区分である章初期・早期・前期・中期・後期・晩期は、それぞれステージIb・IIa・IIb・IIIa・IIIbにほぼ相当します。

(縄文遺跡群世界遺産登録推進本部制作「北海道・北東北の縄文遺跡群」リーフレットの構成図を一部改変)

ステージⅠ 定住の開始

la 居住地の形成



約15000年前に急激な温暖化・湿潤化が進むと、海水面が上昇し、北海道は大陸から切り離されました。北海道・北東北では、針葉樹から広葉樹へと植生が大きく変化し、ブナやクリ、クミミなどの堅果類が増え、海流によって多くの回遊魚が来るようになりました。

これらの新しい食料資源を利用するために、列島各地に先駆けて煮沸用の土器が出現しました。重くて壊れやすく移動生活に適さない土器の利用は、人々が移動生活から定住生活への転換する新たな文化の幕開けを告げるものでした。

ステージⅡ 定住の発展

IIa 集落施設の多様化



その後も温暖化は続き、約6300年前に海進のピークを迎えます。ブナ林がもつ多様な森林資源を利用しながら、のちに円筒土器文化と呼ばれる地域文化圏が成立し、クリやウルシなど有用な植物の利用が盛んになります。5000年前頃までは穏やかな気候が続き、定住が最も安定了。

各集落は、居住域、墓域に加え、定住を安定させるための貯蔵施設、衛生環境を保つためと祭祀的な性格をもつ「捨て場」がつけられ、集落の構成要素が多様になりました。北黄金貝塚では、道具の廃棄に関わる「水場遺構」もつけられています。

ステージⅢ 定住の成熟

IIIa 共同の祭祀場と墓地の進出



約4200年前に一時的な寒冷化が起きると、その影響で集落は小規模になって分散し、これまで利用が少なかった丘陵や山地へも進出するようになります。一方、分散した集落間の結びつき(紐帯)を深めるため、共同墓地や環状列石といった共同祭祀場がつけられました。

共同祭祀場の構築・維持・管理は、複数の集団が協働で計画的に行ったと考えられ、地域社会が充実していたことを示しています。入江貝塚では、筋萎縮症に罹って介護されていたことが分かる人骨が出土しており、集落における相互扶助の精神がうかがえます。
※関連遺産の鷺ノ木遺跡はこの時期に相当します。

Ib 集落の成立



温暖化が進み、約9000年前の北海道南部・北東北では冷温帯落葉広葉樹林(北方ブナ帯)が平野部や海岸線まで広がりました。北方ブナ帯は豊富な食料資源に恵まれているため、長期間の安定した定住や集落の形成が可能となりました。

また、海水面上昇とともに潮流が活発化し、さまざまな魚が生息するようになり、沿岸地域に多くの集落がつけられました。集落で亡くなる人もいるため、垣ノ島遺跡のように、生活の場である居住域と死者を埋葬する墓域が明確に区分されるようになります。

IIb 拠点集落の出現



比較的安定した気候のなか、多様な施設がそろった「拠点集落」が登場し、存続期間が長くなるものもありました。祭祀場はより多様化し、長期間かけてつくった大規模な盛土も見られることから、同じ場所ですべてを超えて祭祀・儀礼が行われていたことがわかります。

また、貝塚からは人骨や獣骨、意図的に破壊された土器や石皿等が出土することがあり、不要なものをついに捨てるのではなく、祭祀的な活動も行われたと考えられます。大船遺跡では、大規模な盛土遺構が形成されるなど、祭祀場の発達が顕著になっています。

IIIb 祭祀場と共同墓地の分離



約3000年前に再びやや冷涼な気候となり、集落の減少と小規模化が続きます。共同墓地が共同祭祀場や集落構成から分離してつくられるようになり、多様な祭祀・儀礼のなかでも葬送に関する儀礼が特化します。これは、祖先崇拜の醸成を示しています。

審美性豊かな土偶や漆製品など、多彩な副葬品が出土する共同墓地もつくられました。北海道では、キウス岡提墓群のように大規模な土手で囲まれた岡提墓と呼ばれる共同墓地が発達しました。高砂貝塚では、配石のある墓や胎児骨を伴う妊産婦の墓も見つかっています。

垣ノ島遺跡

【所在地】北海道函館市白尻町
(N41° 55'45" E140° 56'54")
【史跡指定】2011（平成 23）年 2 月 7 日

ステージ1b 7000 年前 (5000BCE)

（遺跡年代：縄文早期～後期 9000 ～ 3000 年前）



集落展開のステージ

【ステージ1 定住の開始 1b 集落の成立】



居住域と墓域の分離

遺跡の立地



【外洋に面した標高 32 ～ 50m の海岸段丘上】

居住域・墓域で構成された集落と国内最大級の盛土遺構

函館市南茅部地区を流れる垣ノ島川沿い、標高 32 ～ 50m の丘の上にある集落跡です。遺跡の中央部に、地面を掘り込み、耐久性があって長期間居住できる竪穴建物ができる、その南側に墓域があり、日常と非日常の空間が区別されていたことを示しています。

竪穴建物からは漁網用の石鍾が多く出土し、生業として漁労が盛んだったことがわかります。また、墓には子どもの足を押しつけた足形付土板が副葬され、この地域特有の精神文化を伝えていきます。

4000 年前ごろに構築された長さ 190m、幅 120m、高さ 2m の「コ」の字形の盛土遺構は、国内最大級の規模です。盛土には大量の遺物が含まれていることから、祭祀・儀礼の場所と考えられ、今も実際に私たちが目で見ることができ、重要な遺構です。

ポイント 1

耐久性のある竪穴建物が出現し、本格的な定住がはじまります。そのため、集落の構成員が住む居住域とは別に、そこで亡くなった人のための空間である墓域もつくられました。その墓からは子どもの足形を付けた土板（足形付土板）が出土するなど、当時の高い精神性もわかります。

ポイント 2

太平洋に面した段丘上にある集落跡。竪穴建物の床面から漁労に使う網の石鍾も出土しており、定住の開始期から漁労が盛んであったことを示しています。

ポイント 3

前ステージ (1a) の居住地から、本格的な定住に移行して住居と墓が分かれた集落となります。この後 (11a) はさらに貯蔵施設や捨て場が形成され、集落の施設が充実していきます。

集落の立地と生業の関係



太平洋に流れる垣ノ島川の左岸に立地する遺跡です。前面はサケ、マグロ、イカなど水産資源豊かな太平洋に面し、背後にはドングリやクルミなど森林資源に恵まれた落葉広葉樹が広がっていました。ここに集落がつくられた約 9000 年前は温暖化のピークであり、当時は遺跡の直下まで海岸線が迫っていたと考えられます。また、各時期により台地の利用が異なっており、集落の位置も移動していました。

自然資源を利用した生活

豊富な魚介類をとるために、漁労の道具が発達

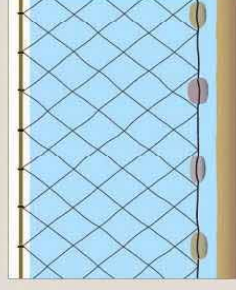
石鍾

漁網用のおもりとして使用された石器。
前列中央は長さ 9.5cm × 7.8cm



石鍾の出土状況

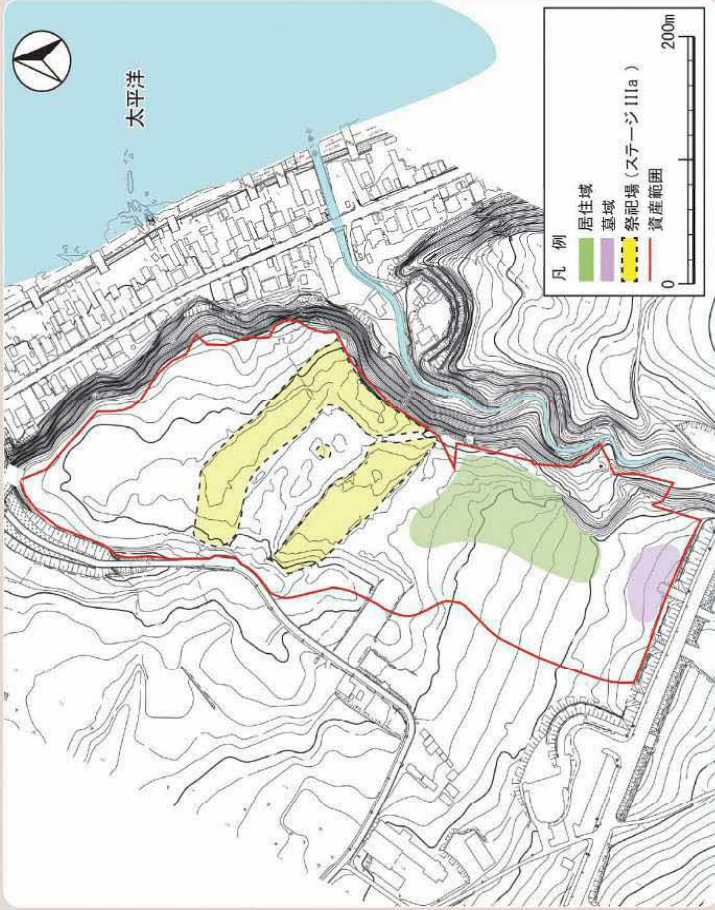
竪穴建物跡床面の一部から、37 点の石鍾がまとまって出土した



石鍾の使用イメージ

両端の切り込みに縄をかけて使っていたと考えられる

顕著な普遍的価値 (OUV) に関わる遺構の概念図



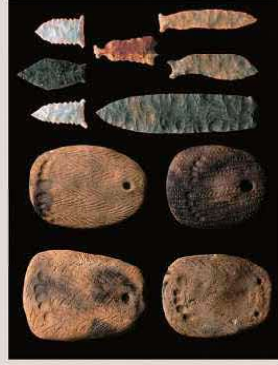
住居数棟からなる集落ができ、居住域と墓域の分離が明確になりました。墓域の出現は、日常と非日常の空間を区別し、その土地に愛着をもち、集落の人々の結びつきを強めるとともに、祖先を崇拝する慣習にもつながったと考えられています。

祭祀・儀礼にみられる精神性



大型土坑墓と土坑墓群

合葬墓と見られる大型の墓から、足形土板が10点出土した



副葬品の足形土板と石器

足形土板は大人の墓から出土し、亡くなった子ども
の形見を副葬したと考えられる

定住の成熟前半 (ステージ IIIa) につくられた、大規模な盛土遺構



「コ」の字形をした長さ190m以上の大規模な盛土で活発な祭祀・儀礼が行われていた



盛土遺構の断面と基底部から、ステージIIa (縄文時代前期) の土器が出土した

公開・活用の状況

2021年7月に中跡垣/島遺跡がオープン。当時の地形を生かした整備を行い、盛土遺構や竪穴建物跡などが見学できるほか、発掘調査などの体験もできる



垣ノ島遺跡管理棟

北海道函館市白尻町416-4
TEL / 0138-25-2030 (函館市縄文文化交流センター)
開館時間 / 4月～10月9:00～17:00、
11月～3月9:00～16:00

休館日 / 年末年始 (12月29日～1月3日)



函館市縄文文化交流センター

北海道函館市白尻町551-1
TEL / 0138-25-2030
開館時間 / 4月～10月9:00～17:00、
11月～3月9:00～16:30

休館日 / 月曜 (祝・休日の場合は翌日)、
毎月最終金曜、年末年始 (12月29日～1月3日)

※遺跡へのアクセスはP62参照

函館市縄文文化交流センターに、出土品の足形土板や石器、漆塗リ注口土器などを展示している

縄文から見える現代の暮らし

命を大切に慈しむ縄文の心

垣ノ島遺跡は集落のなかで居住域と墓域が分かれて存在する先駆けとなった遺跡です。その墓域から、7000年前頃に北海道だけに分布する特徴的な足形土板が出土しました。こうした足形土板は道南、道央で30数点が見つかっていて、その約半数を占める17点が垣ノ島遺跡から出土しています。

垣ノ島遺跡の足形土板は、粘土板に小さな子の両足または片足の足形をつけ、かかと側に1～2カ所穴が開いています。住居内に埋めたくておき、箱が亡くなって埋葬するとき一緒に埋めたのかもしれない。箱が亡くなったとしても、あるいは子どもが亡くなったため、亡くなった子の形見として、あるいは子どもの成長や健康の祈願などの説が考えられますが、いずれにしても子どもに対する親の深い愛憎が生んだものに違いありません。

りません。また、あらゆる命を大切にする縄文文化の精神性の根幹を述べている。縄文時代は大きな争いがなかったといわれ、集落は敵の攻撃を防ぐ柵のようなものがなく、開放的だったと考えられます。命を大切に相手のことを思いやる気持ちは、時代や地域を超えて現代にもつながっています。



垣ノ島遺跡の足形土板出土状況。其の土坑墓の基底部から重なる出土した

北黄金貝塚

【所在地】北海道伊達市北黄金町
(N42° 24' 08" E140° 54' 42")
【史跡指定】1987(昭和62)年12月25日

ステージIIa 7000～5500年前(5000～3500BCE)
(遺跡年代:縄文前期～中期 7000～4000年前)

集落展開のステージ

【ステージII 定住の発展 IIa 集落施設の多様化】



**集落的施設の充実
祭祀場的な捨て場が形成**

遺跡の立地



【内湾に面した標高 10～20m の丘陵上】

内湾に面した大規模な貝塚を伴う集落

内浦湾を望む丘陵上に立地する貝塚を伴う集落跡。台地上に居住域と墓域、貝塚が配置され、低地に湧水点と水場遺構があります。貝塚からは、貝殻や魚骨、動物の骨や角でつくられた骨角器などが出土し、海進・海退などの気候変動に適応しながら、漁労を中心とした生業が行われていたことを示しています。貝塚は祭祀場的な性格も持っており、貝塚の中から人の墓や動物儀礼の痕跡が確認されています。また、低地にある水場遺構からは意図的に壊された石皿やすり石などの石器が大量に出土し、廃棄に伴う祭祀が行われていたと考えられています。

ポイント1

集落は多様な施設で構成され、貝塚に人の墓が見られることから、すり石や石皿などの石器を廃棄した水場遺構に祭祀や儀礼の跡が見られることから、あらゆるものの命を送る精神文化があったとも考えられています。

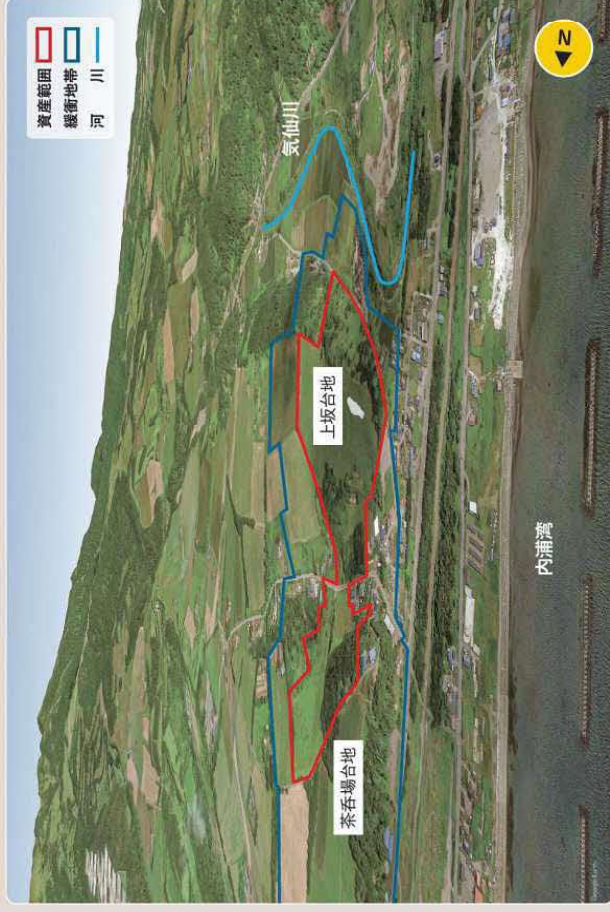
ポイント2

内浦湾に面した緩やかな海岸段丘上にある貝塚を伴う集落。温暖化のときはハマグリやマガロなどが多く、冷涼化とともに海獣類も捕るなど漁労の対象を変えているほか、海進・海退による海岸線の変化に合わせて集落の位置も移動するなど、気候変動に合わせて生活のあり方が見えてきます。

ポイント3

前ステージ(IIb)の本格的な定住により住居と墓が分かれた集落に、祭祀場的な性格を持つ捨て場(貝塚・水場)が加わり集落施設が多様化しました。この後のステージ(IIc)では、祭祀場が確立し、集落の構成要素が揃った拠点集落が出現します。

集落の立地と生業の関係



遺跡は内浦湾の北東岸、低地を挟んだ2つの台地上(上坂台地・茶右場台地)にあります。ステージIIaのころ、台地は落葉広葉樹の森に覆われていました。また、低地に見られる湧水点は、背後の東山と呼ばれる山並みの雨水が地下を通り湧き出したものです。北黄金貝塚は湧水点を中心に展開した集落として典型的で、現在も遺跡の中で湧水点をばったり確認できる例はまれです。

台地の南側には気仙川に沿って低地が広がっており、温暖期には海進によって、ここまでが入り江になっていました。貝塚からは、前浜で捕ったホタテの貝殻やカレイの骨がたくさん見つかっています。噴火湾では現在もホタテ漁が盛んで、マツカワという大型のカレイはまちのブランド品になっています。北黄金という地名も、元は黄金薬(コンブのとれるところの川)という意味のアイヌ語に由来しており、コンブを食べるウニの殻も貝塚から大量に出土しています。このように、砂浜や岩礁など多様な海岸線に生息する豊富な魚介の利用は、約6000年前から現在まで続いています。

自然資源を利用した生活

噴火湾と台地の豊富な資源を利用した痕跡



貝塚断面

ステージIIaの半ば、北側の茶右場台地上につくられたC地点貝塚は、下はハマグリが多く、上に行くに従ってホタテ、ウニが多くなる。一番下には、シカの頭骨を並べた儀礼の跡も見つかった



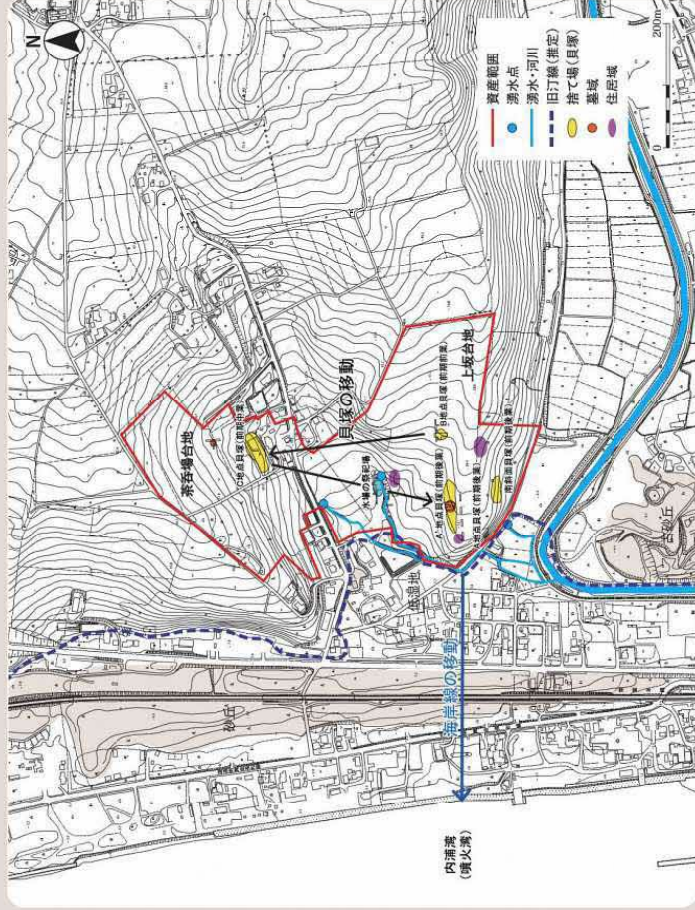
貝塚のホタテとウニ
貝の穴のあるホタテの貝殻。まわりの茶色いものはウニのトゲや殻

動物の骨

貝塚から出土した、シカ、キツネなど陸の動物や、オットセイ、イルカなど海獣類の骨



顕著な普遍的価値 (OUV) に関わる遺構の概念図



捨て場(貝塚)の変遷。上坂台地上のB地点貝塚は縄文海進期の温暖な時期にあたります。その後、矢印のように茶香場台地のC地点へ移動し、さらに寒冷化による海岸線の後退にともなってA'地点へ移動します。これは集落が海岸線を追いかけるように移動していったことを示すとされています。

水場遺構

水場遺構では、役目を終えた石の道具に対する儀式が行なわれたと考えられ、すり石や石皿など1209個が1カ所にまとまって出土。多くが壊され、石皿は伏せられた状態だった。このような水場の祭祀場が見つかった例はほかがない



すり石

水場遺構から大量に見つかった。持ち手が独特の形のすり石。ものをすり潰す道具で、北海道式石冠とも呼ばれている



シカの頭骨

貝塚の下からは、シカの頭骨を6つならべて土器などで覆うなどの儀礼の跡が見つかった



クジラ骨製の刀

貝塚の灰の中から見つかった、クジラの骨でできた刀。刃と呼ばれているが、刃はついておらず、切ったり刺したりすることはできない。祭祀の道具として火の中に投げ入れられ、変形したと思われる



祭祀・儀礼にみられる精神性

貝塚が守った縄文人骨



北黄金貝塚から見つかる人骨は、非常に保存状態が良く、北海道の縄文人骨研究の基礎資料になっている。多くの場合、日本に広がる酸性土壌が入骨や骨角器などの資料を溶かしてしまうが、貝塚の炭酸カルシウムなどの成分で土壌が中和され、失われなかつたと考えられる。貝塚は資料保存に重要な役割を果たしている

公開・活用状況

史跡公園として整備され、貝塚や竪穴建物が復元されています。隣接するガイダンス施設「北黄金貝塚情報センター」では、出土品や土坑墓のようすを展示しています。

※遺跡へのアクセスはP62参照



北黄金貝塚情報センター

北海道伊達市北黄金町 75
TEL 0142-24-2122
開館時間/9:00~17:00
休館日/12月1日~3月31日
入場料/無料

史跡 北黄金貝塚公園

開園時間/9:00~17:00 公開期間/4月1日~11月30日 入園料/無料

縄文から見える現代の暮らし

市民が守り伝えた、縄文との出合いの丘

北黄金貝塚から出土した約6000年前の人骨を調べると、食料の約7割を海洋資源が占めていたことがわかりました。貝塚から出土しているカタチやヒラメは、現在も地域の主要な海産物です。こうした縄文の暮らしが明らかになったのは、伊達の高校教師だった考古学者・峰山巖が貝塚を発見し、地元の高校生たちと発掘調査を行ったことに始まります。そして、南側の台地上を農地として所有していた農家・上坂竹次郎氏の理解と協力があったからこそ成し得たことでした。上坂氏は峰山と生徒たちを物心ともにサポートしたことで発掘調査が進み、遺跡として今に残されたのです。峰山は貝塚から出土した新発見の土器を「上坂式」と名付けて感謝の心を表しました。

台地の下には、約6000年前と同じように水が湧き出し、小川となって流れていました。北側の「茶香場台地」は、明治になり伊達に移住した仙谷藩一門・巨理伊達家に由来します。当主の伊達邦成一行が室蘭との行き帰りの途中、この台地の湧き水で淹れたお茶を飲んで休憩したとされ、近代へ移り変わる時代に「縄文と武家が出会った丘、なのです。

遺跡の史跡公園としての整備には、多くの市民が関わりました。発掘調査でわかった地主から「縄文の森」の復元が行われ、旭樹などの活動が20年以上続いています。北黄金貝塚は、最初の発掘から保存・復元まで、市民が主体となって守り伝えた遺跡と言えるでしょう。

地域の歴史がわかる施設 だて歴史文化ミュージアム

伊達市梅本町 57 番地 1
TEL / 0142-25-1056
開館時間 / 9:00 ~ 17:00 (展示室入場は 16:30 まで)
休館日 / 月曜
入場料 / 一般 300 円、小・中学生 200 円



大船遺跡

【所在地】北海道釧路市大船町
(N41° 57'27" E140° 55'30")
【史跡指定】2001 (平成 13) 年 8 月 13 日

ステージII b 4500～4000年前(2500～2000BCE)
(遺跡年代:縄文前期～中期 5500～4000年前)

集落展開のステージ

【ステージII 定住の発展 II b 拠点集落の出現】



祭祀場が確立し、
集落要素が整った拠点集落

遺跡の立地



【外洋に面した標高 30～50m の海岸段丘上】

豊かな水産資源に支えられた拠点集落

太平洋を望む段丘上に立地する拠点集落。竪穴建物、貯蔵穴、盛土、墓などが分離して配置されています。竪穴建物は床を深く掘り込んだものが多く、深さ 2m を超える大型のものもみられます。祭祀場である大規模な盛土には、膨大な量の土器や石器、焼土などが累積し、長い間にわたり祭祀・儀礼が行われていたことを示しています。また、クジラやオットセイなどの海獣骨、マグロやサケなどの魚骨、クリやクルマミなどの堅果類、ヤマブドウ、キハダ、ウルシなどが出土し、海や川での漁と、森林資源の利用も活発に行われていました。沿岸地域の生活の様子と精神文化を示す重要な遺跡です。

ポイント1

祭祀場など集落を構成する要素がそろった拠点集落です。竪穴建物の規模も大きく、深さ 2m、長軸 10m を超えるものもあります。土器・石器などの道具類を主に廃棄した盛土遺構がつくられており、火を焚いた跡があることから祭祀場と考えられています。

ポイント2

外洋(太平洋)に面した段丘上にあり、クジラ、オットセイ、マグロ、タラなどの水産資源が集落を支えていました。また、もともとは北海道になかったクリの実がまとまって出土しており、本州の影響をうかがうことができます。

ポイント3

前ステージ(IIa)に祭祀場が加わり、集落を構成する要素が整います。この後、寒冷化により集落が縮小・分散し、環状列石等の共同祭祀場が現れるステージIIIaに移行します。

集落の立地と生業の関係



大舟川左岸の標高30～50mの海岸段丘に立地した拠点集落です。水産資源豊富な太平洋に面し、後背地には森林資源豊富な落葉広葉樹の森が広がり、またサケ・マスが遡上する大船川があるなど、安定した食料確保ができる恵まれた自然条件だったといえます。現在までに大きな地形の変化はないと考えられ、当時の漁や舟での交易の様子がイメージできます。また、集落の周りに食料や木材を得るためにクリの木を植えていたようです。遺跡背後の山は今も「栗の木山」と呼ばれ、ここに残るクリは縄文時代に本州からもちこまれたクリの子孫かも知れません。

自然資源を利用した生活

食料の宝庫である海や森との関わりを物語る遺物が多数出土



クジラの椎骨
最長部約70cm、
廃棄された竪穴
建物跡から残っ
た状態で出土した

海獣骨
出土したオットセイの牙と歯

クリの実
縄文時代に本州から移入され
たクリが、炭化した状態で多
数出土した

入江貝塚

【所在地】北海道虻田郡滝路町入江
(N42° 32' 34" E140° 46' 31")
【史跡指定】1988(昭和63)年5月13日

ステージIIIa 3800年前(1800BCE)

(遺跡年代(入江・高砂貝塚):
縄文前期～晩期 5500～2800年前)

集落展開のステージ

【ステージIII 定住の成熟 ステージIIIa 共同の祭祀場と墓地の進出】



集落は小規模となり分散

遺跡の立地



【内湾に面した標高約20mの段丘上】

寒冷化イベントを反映した集落と貝塚

内浦湾を望む段丘上にある、貝塚をともなう集落跡。竪穴建物による居住域、墓域、貝塚で構成されます。貝塚からは、アサリやイガイなどの貝類、ニシン、ヒラメ、マグロなどの魚骨、イルカなどの海獣骨、動物の骨や角を加工した釣針や銚などの骨角器が出土し、漁労や狩猟が行われていたことを示しています。墓域からは、ポリオ(小児マヒ)か筋ジストロフィーが原因と思われる、筋萎縮症にかかった人の骨が見つっており、集落内で手厚い介護を受けながら生きていきました。このほか、イノシシの牙で作られた特異な装身具なども出土し、祭祀場としての性格も見られます。

ポイント1

定住成熟期の前半の、一時的な寒冷化により集落が小規模化した時期にあたります。周辺には共同の祭祀場や墓域があったとも考えられ、これら施設を維持・管理していた小規模集落の典型と言えます。

ポイント2

内浦湾に面した段丘上にあり、背後には落葉広葉樹の森が広がっていました。貝塚からは貝類よりも魚類、海獣類が多く出土しており、シカ角製の釣針など多様な漁労具も見つかっています。

ポイント3

寒冷化した影響で、集落規模は前ステージ(IIb)に比べて小さくなっています。次のステージ(IIIb)では、共通の祭祀・儀礼活動の拠点となる施設が集落から離れたところに独立して構築されます。

集落の立地と生業の関係



遺跡は内浦湾沿岸から300mほど内陸の、標高約20mの段丘上に位置します。段丘の東側を流れる坂谷川の周辺には入り江になっていたりと考えられ、そこから段丘上の人々が住み始めました。そしてステージIIIaのころになると、寒冷化により海が遠のき、川の周辺に砂が堆積して陸地となり、遺跡のある段丘の下から海底にかけて砂地が広がり、沿岸部には砂丘が発達しました。

海洋環境は現在とほぼ同じでヒラメやカレイの漁が行われていました。これらは今も地域を代表する水産資源です。貝塚からは、シカの角などを加工して作られた骨角製の漁労具および装身具が数多く出土しています。軸と針先を組み合わせて使う大型の釣針も見つかり、巨大なカレイの仲間・オヒョウの漁に使用されていたと考えられます。もっとも特徴的なのは、イルカやクジラなど海獣類の骨が大変多いことです。そのため、貝類が中心の貝塚より黒っぽい色に見えることから「黒い貝塚」と呼ばれています。

自然資源を利用した生活

大型の魚や海獣類を捕らえる道具が発達

貝塚断面

ステージIIaからステージIIIaまで約1000年分が堆積した貝塚は、魚と海獣の骨が多く黒っぽい色をしていることから「黒い貝塚」と呼ばれている。また、人骨が15体見つかり、そのうちの1体は、幼少期から筋萎縮症で手足が不自由だった人と思われる

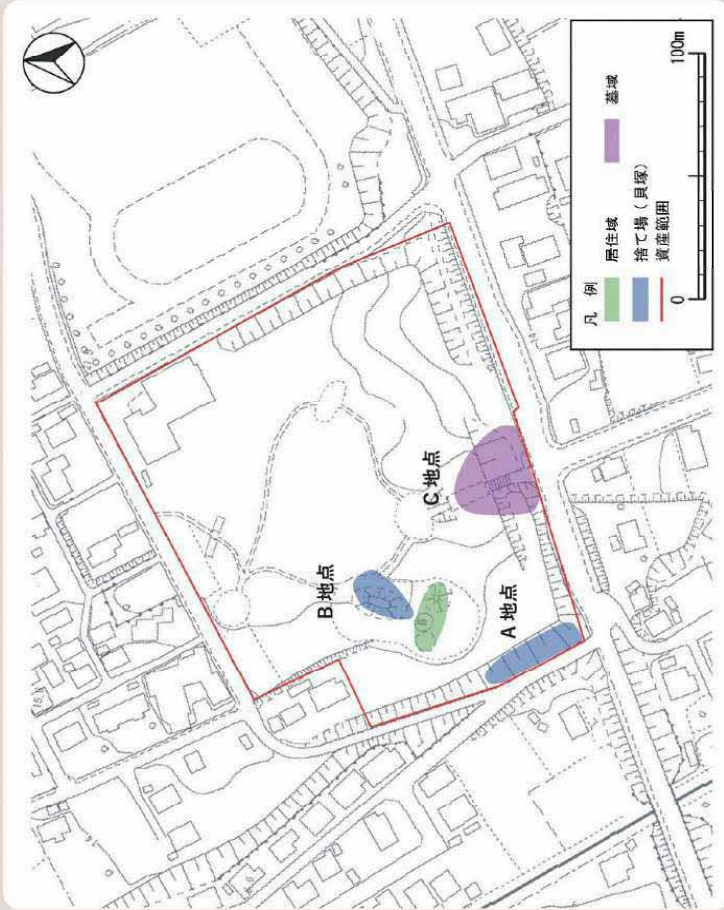


シカ角製の釣針

小さなものから組合せ式の大きなものまでさまざまな種類の魚や大きさを使い分けられていたと考えられる。特徴的な組合せ式の大きな釣針は、体長2mにもなるカレイの仲間・オヒョウの漁に使用された。このほか海獣類用の銚頭も見つかっている



顕著な普遍的価値 (OUV) に関わる遺構の概念図



寒冷化により小規模になった集落の典型。多数の墓域と貝塚も見つかっています。

祭祀・儀礼にみられる精神性



イナシヤ製装身具

イナシヤの犬歯を人の歯の形に加工した装身具。イナシヤは北海道に生息しないことから、本州から持ち込まれたと考えられる。発掘されたときはベンガラ(赤い顔料。祭祀的な意味がある)が付着していた



ヒスイ製の玉

新島産のヒスイは、貴重で特別なものだったことを物語る

貝塚に埋葬された筋萎縮症の人の骨

C地点貝塚からはステーションII aからII aの墓15基が発見されている。土坑ではなく土を盛って埋葬した墓で、貝塚を特別な場所として利用していたことがわかる。そのうちステーションII aの1体は筋萎縮症にかかり手足が不自由だった成人男性と判明し、周囲のサポートを受けながら暮らしていたことがうかがえる



TOPIC

南から来た貝のアクセサリー

南からの交易品として、入江貝塚周辺には生息していないベンケイガイや千草・厚殻半島を生息の北限とするイモガイ、伊豆諸島産と思われるオオツタノハガイで作られた、腕輪やネックレスなどのアクセサリーが見つかっている。オオツタノハガイの製品は国内最北での出土である



公開・活用の状況

※遺跡へのアクセスはP62参照

史跡 入江貝塚公園

北海道虻田郡洞爺湖町入江
貝塚展示施設公開時間/9:00～17:00
入場料/無料



入江・高砂貝塚館

北海道虻田郡洞爺湖町高砂町44
TEL 0142-76-5802
開館時間/9:00～17:00
休館日/月曜日、祝日の翌日
入館料/無料

遺跡は史跡公園として整備されています。C地点にある約20mの貝塚剥ぎ取りを貝塚の中にもぐりこむように見学でき、園内にはステージII aの壙穴建物も復元されています。徒歩10分ほどのところには、2021年にリニューアルオープンしたガイダンス施設「入江・高砂貝塚館」があります。

縄文から見える現代の暮らし

縄文から現代まで人々が暮らす、住宅街の遺跡

入江貝塚は、住宅地に囲まれた場所に位置します。現在は洞爺湖町ですが、もともと北田という名の土地で、アイヌ語で「釣針を作る川」の意味の「アブタベツ」が由来とされています。この地には約7000年前から人々が定住し、集落が作られてきました。遺跡内ではアイヌ文化の墓も見つかります。少し離れたところに周辺地域の中心集落「アブタコタン

貝塚が見つかり、後年、伊達市北黄金貝塚の発見で知られる考古学者で伊達高校の教師・藤山龍と生徒たちが発掘調査を行いました。早く発見されなかったのは、1663(寛文3)年の常陸山噴火による火山灰が遺跡の上に厚く積もり、バックされた状態だったからです。そのため、上に建物が建てられても壊れることなく残され、入江貝塚のある場所が縄文時代からアイヌ文化、そして現代までずっと利用されてきたことがわかったのです。

戦後は住宅地や畑地になったのち、1988(昭和63)年に国の史跡に指定されました。特急が停車するJR洞爺駅から徒歩約15分と利便性がよく、約400m離れたところにある高砂貝塚とともに、気軽に訪れることができる世界遺産の遺跡となっています。これも、人々の暮らしが同じ場所で続いているからこそと言えるでしょう。

地域の歴史がわかる施設 虻田郷土資料館

北海道虻田郡洞爺湖町高砂町44
(入江・高砂貝塚館に併設)
TEL / 0142-76-5802 (入江・高砂貝塚館と共通)
開館時間/9:00～17:00
休館日/月曜日、祝日の翌日
入館料/無料





高砂貝塚

【所在地】北海道釧路市釧路湖町・高砂町
(N42° 32' 48" E140° 46' 11")
【史跡指定】2002 (平成 14) 年 3 月 19 日

ステージIII b 3000 年前 (1000BCE)

(遺跡年代 (入江・高砂貝塚) :
縄文前期～晩期 5500 ～ 2800 年前)

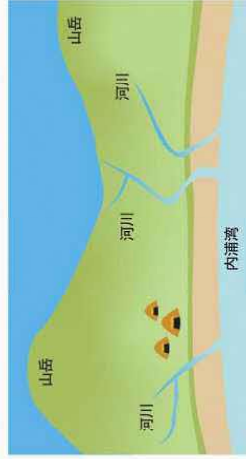
集落展開のステージ

【ステージIII 定住の成熟 III b 祭祀場と墓地の分離】



祭祀・儀礼が充実し、
共同墓地・共同祭祀場が顕著となる

遺跡の立地



【内湾に面した標高約 10 m の低地】

内湾に面した貝塚と共同墓地

内浦湾を望む低地に立地する、貝塚をともなう共同墓地。墓域は土坑墓と配石遺構で構成されます。土坑墓からは、抜歯の痕跡が認められる人骨や、胎児骨をともなう妊産婦の墓が確認されています。配石遺構からは、土偶や土製品などが出土し、当時の葬送や祖先崇拝などを示しています。貝塚からはタマキビ、ホタテ、アサリなどの貝類に、ニシン、カレイ、マガロなどの魚類のほか、シカ角製の銚頭など漁労具も多数出土しています。沿岸地域における漁労が中心の生業と、祭祀・儀礼のあり方を伝える重要な遺跡です。

ポイント1

内浦湾に面した平地にあり、背後には落葉広葉樹の森が広がっていました。貝塚からは、とくにカレイやヒラメが多く出土することから、周辺には砂浜と砂地の海底が発達していたことを示しています。

ポイント2

定住成熟期後半、冷涼な気候による集落の小規模化が継続。土坑墓と配石遺構からなる共同墓地が集落から独立して作られ、土坑墓の土偶や土器などの副葬品からは墓前祭祀が行われたことがわかります。

ポイント3

前ステージ (III a) から一時的な寒冷化が続く、小規模化・分散化した集落間の結びつきを強めるための共同墓地が作られ、葬送に関する儀礼が特化し独立します。このあと2400年前頃に、北東北では水稲農耕が始まり、北海道では縄文文化へと移行変わって、縄文文化は終焉を迎えます。

集落の立地と生業の関係



遺跡は標高約 10m の低地にあり、ステージIII b の寒冷な時期に作られた貝塚をともなう共同墓地です。この墓地を利用していた集落は今のところ発見されていませんが、遺跡の近隣にあつたと考えられます。また、遺跡内に流れる高砂川は、現在では改修されて流れが変わっていますが、縄文時代から同じようなところを流れていたと思われる。さらに、調査によって川の跡がもう 1 本見つかりました。この地域では近年まで湧き水も多く見られ、縄文から現代まで、人々は水が豊富な土地に暮らし続けてきたことがうかがえます。

貝塚からは、貝類ではアサリ、魚類ではカレイやヒラメの骨が多く出土しています。これらは今も地域を代表する水産資源で、海洋環境は現在と同じ砂地になっていました。漁労具では、シカ角製の小型の釣針や、銚頭が見つかっています。この遺跡は、貝塚の多い内浦湾沿岸でも発見例の少ないステージIII b の時期の貝塚であり貴重です。

自然資源を利用した生活

冷涼な気候での漁労を主体とした生活

貝塚断面

ステージIII a から III b まで 3 つの貝塚が発見されている。また、貝塚からはステージIII b の土坑墓 28 基が見つかった

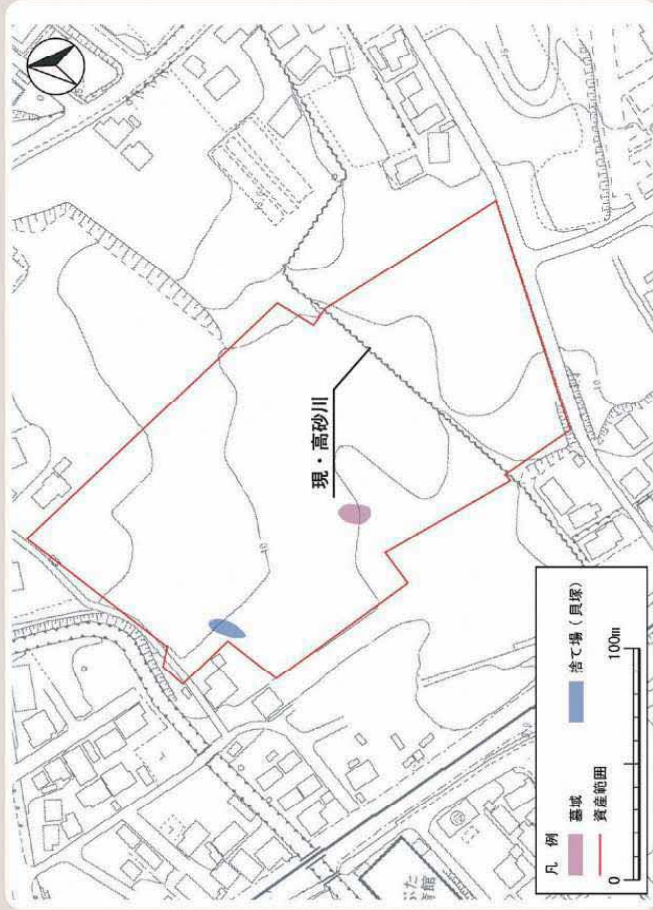


シカ角製銚頭



オットセイやイルカ類に使用されたと思われる銚頭。細かい文様が刻まれている

顕著な普遍的価値（OUV）に関わる遺構の概念図



ステージIII bの捨て場（貝塚）、墓域とそれともなう副葬品が出土しており、周辺にあった集落の共同墓地と考えられます。



土坑墓の人骨

貝塚の中に作られていた土坑墓の人骨。40～50代の成人女性と思われる。40～50代の成人女性と思われる。この遺跡で見つかった人骨のほとんどが手足を折り曲げた屈葬で、多くが頭を北面に向けていた



抜歯の風習

抜歯の痕跡が認められる人骨が見つっている。健康な状態の歯を抜くことで、成人の通過儀礼としていた



頭部と板状の土偶

土偶には縄文人の神話的世界観が表現されている。高砂貝塚では、ヒトのお墓の周辺で「再生」の願いを込めて儀礼が行われたと考えられる。板状の土偶には頭部に貫通する穴があり、紐を通していたと思われる



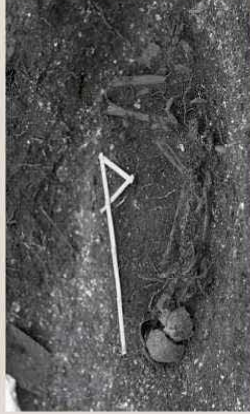
配石遺構

墓の近くでは、石を円形に並べた配石遺構が見つっている。そのひとつから土偶と3つの小さな土器が発見され、ベンカラ（赤い顔料。祭祀的な意味がある）が満たされていたものもあった

TOPIC

胎児骨をもなう妊産婦の墓

骨盤のあたりに胎児の骨がある妊娠した女性の人骨が見つっている。女性の耳の骨には外耳道骨腫（冷たい水の刺激によってできるコブ。通称サーファーズイヤ）が見られ、日常的に海に潜って漁をしていたことがうかがえる。また、副葬されていたヒスイの玉は、その緑色が命の再生の象徴とされ、妊婦だったためとくに手厚く葬ったのかもしれない



公開・活用の状況

※遺跡へのアクセスはP62参照

史跡 高砂貝塚公園

北海道虻田郡洞爺湖町高砂町
公開時間／9:00～17:00
入場料／無料

史跡整備が行われ、貝塚と、竪穴建物のくぼみや墓などが復元されています。400mほど南車には入江貝塚公園があり、徒歩5分ほどのところには、2021年にリニューアルオープンしたガイダンス施設「入江・高砂貝塚館」があります。



入江・高砂貝塚館

北海道虻田郡洞爺湖町高砂町 44
TEL 0142-76-5802
公開時間／9:00～17:00
休館日／月曜日、祝日の翌日
入館料／無料

縄文から見える現代の暮らし

現在につながる、水とも生きてきた人々の痕跡

高砂貝塚は、入江貝塚と約400mしか離れていない住宅地の中にあり、縄文時代から現代まで人々が利用し続けてきたと考えられます。また、現在のようによくの建物や文化の痕跡が見つかっており、史跡として整備される前もトウモロコシなどの畑として利用されてきました。遺跡の中を流れる高砂川の周辺には水田が作られていたこともあったといわれています。

このように水が豊富な理由は、高砂貝塚から約5kmほど東にそびえる有珠山の噴火などによってつくられた地形が影響していると考えられ、有珠山の麓には湧水が多く見られます。また、約1万年前に起こった有珠山の山崩れは海まで達し、海岸を入り込んだ地形になりました。岩の間は貝やカニ、タコなどの格好の住みかになっていました。

縄文の人々の痕跡が見つかっているのは、現在のところ遺跡の範囲のみで、それ以外の場所で見つかることは見つかっていません。彼らがこの場所にこだわったのは、水が理由のひとつだった可能性があります。2021（令和3）年に整備された高砂貝塚公園では、高砂川が流れて流れが復元され、縄文の環境が感じられるようになっています。縄文から現代まで、豊富な水と海産資源を活用した暮らしがこの地で継いでいることがわかります。

地域の歴史がわかる施設 虻田郷土資料館

北海道虻田郡洞爺湖町高砂町 44
（入江・高砂貝塚館に併設）
TEL / 0142-76-5802（入江・高砂貝塚館と共通）
公開時間／9:00～17:00
休館日／月曜日、祝日の翌日
入館料／無料





キウス周堤墓群

【所在地】北海道千歳市中央
 (N42° 53'12" E141° 43'00")
 【史跡指定】1979 (昭和54) 年10月23日
 【追加指定】2019 (令和元) 年10月16日

ステージIII b 3200年前 (1200BCE)
 (遺跡年代: 縄文後期 3200年前)

集落展開のステージ

【ステージIII 定住の成熟

ステージIII b 祭祀場と墓地の分離】集落



祭祀・儀礼が充実し、
 共同墓地・共同祭祀場が顕著となる

遺跡の立地



【低地に面した標高 15 ~ 21m の緩やかな丘陵麓斜面】

高い土手で囲まれた大規模な共同墓地

石狩低地帯を望む緩やかな斜面に立地する、高い土手を伴う大規模な共同墓地です。周堤墓は、円形の堅穴を掘り、掘った土を周囲に積み上げて構築され、その内側に複数の墓が配置されています。キウス周堤墓群では、9基の周堤墓が群集し、現在でもその形状を視認できます。最大のものは外径83mで、周堤上面から堅穴底面までの高低差が4.7mに達しています。墓には、赤色顔料（ベンガラ）がまかれたものや、墓槽と考えられる立石が埋められたものもあります。独特な墓制で、当時の高い精神性と社会の複雑化を示す重要な遺跡です。

ポイント1

冷涼な気候による地下水位の低下とともに段丘の裾が広がり、土地利用の範囲も拡大しました。近くの川では、遡上してきたサケ・マスを捕獲するなど漁労が行われていたと考えられています。

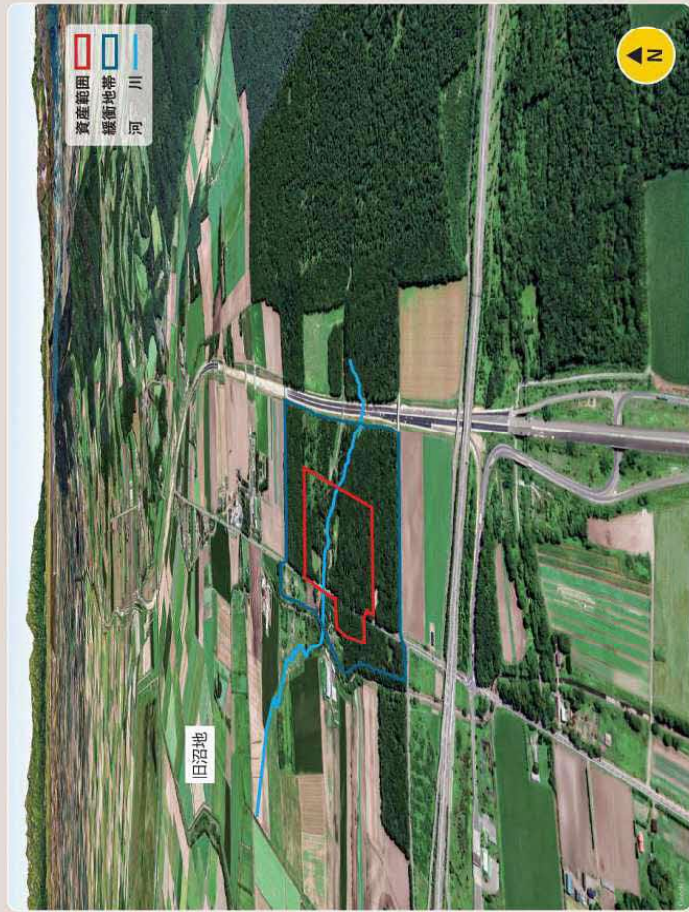
ポイント2

独特な構造の共同墓地が構築され、9基のうち7基は他に類を見ない大規模なもので、2号周堤墓では積み上げられた堤の土の量が約3000m³と推計されるほどです。

ポイント3

多様な祭祀・儀礼のなかでも、葬礼に関する儀式が特化した定住の成熟期後半 (IIIb) に、大規模な土手をもつ共同墓地が現れたことは、高い精神性と社会の複雑化を表しています。

集落の立地と生業の関係

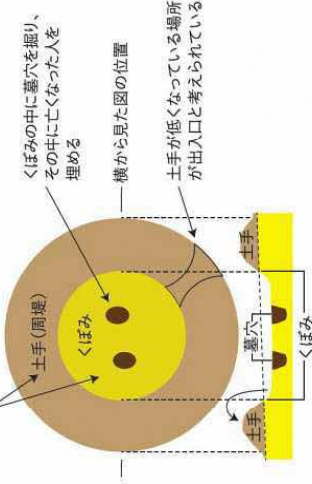


周堤墓群は千歳市街地の北東8km、石狩低地帯（長沼低地）東縁にあたる標高15 ~ 21mの馬追丘陵西麓に位置します。かつては、近くに大小の河川が流れ込む広大な湿地帯があり、後背の丘陵には落葉広葉樹の森が広がっていました。湿地帯では、河川の氾濫などにより低地に水が溜まり、オサトー（長都沼）やマオイトー（馬追沼）といった大小さまざまな沼がありましたが、現在は排水路の整備などによって、沼は消失しています。

用語メモ 周堤墓とは？

周堤墓は環状土籠とも呼ばれる墓地遺構で、地面を円形に掘りくぼめ、その掘った土を周囲に積み上げてつくった土手(周堤)の内側のくぼみ(堅穴)に、複数の土坑墓を設けています。つくられたのは縄文時代後期後葉(約3200年前)の北海道で、以上の遺跡で約70基が確認され、その8割以上が千歳市とその周辺地域に集中しています。周堤墓の一般的な大きさは周堤の外径が10 ~ 30m、その点で、キウス周堤墓群は傑出した存在といえます。

大きな円いくぼみを掘って、土をその周りに積み上げて土手をつくる



▲周堤墓の形と横から見た図

顕著な普遍的価値 (OUV) に関する遺構の概念図

キウス周堤墓群は、集落から離れた場所に形成された墓域の様相を呈しています。独特な構造をもつ9基の周堤墓は、西へ流れる小川の両岸にあり、右岸に2基、左岸に3〜4基が遺状のほかに沿って2つの小群をなしています。

各周堤墓には、出入口と考えられる周堤の低い部分が1カ所あり、定まった経路を辿って出入りしていたと考えられます。9基のうち7基は現況で外径50m、内径20mを超え、最大のものは外径が83m(1号)、内径が43m(4号)、堤の高さが4.7m(2号)と破格の規模を誇ります。このことから、権数の集落によって共同で構築・維持・管理され、祖先崇拜を軸とした共同体の結びつきを確認・強化する機能があったと考えられています。

祭祀・儀礼にみられる精神性

キウス1号周堤墓全景
墓がつくられた周堤の内側は300坪ほどの広さがあり、高さ約2mでめぐる周堤が境界を遮り、閉じた空間となっている。



キウス1号周堤墓の発掘調査状況
高木と灌木が密生し鬱蒼としていた1964年7月、4日間の小規模なトレンチ発掘で土坑墓を5基調査した(1964年撮影)



石棒

キウス4号周堤墓外縁部土坑墓の副葬品で、長さ57cm、中央部の太さ(径)3cm、重さ710g。岩破岩製。両端の頭部にある線刻模様は赤色顔料が施される。



石柱のある墓坑 (キウス1号周堤墓)

長さ1mの第4号墓坑では、砂岩製の石柱が中央に埋設されていた。長さ62mの石柱は直立し、発見時には埋土表面から24cmとび出していた。墓層と推定される(1964年撮影)

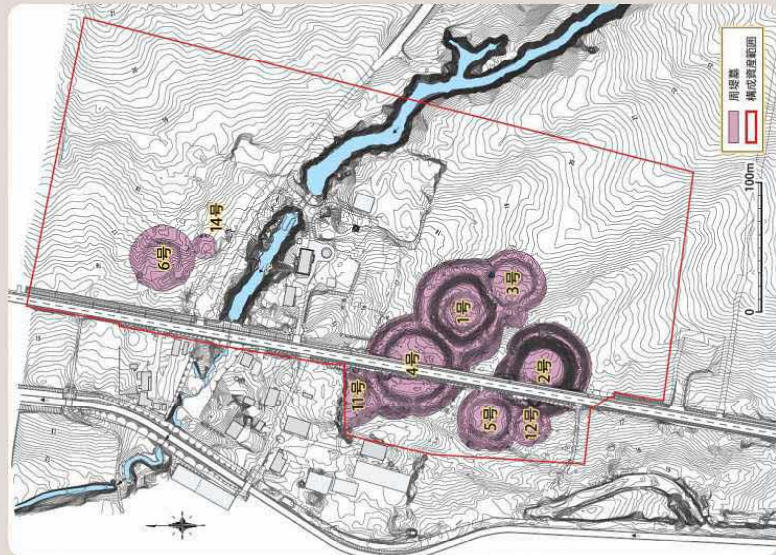


キウス2号周堤墓の断面

周堤は左手の周堤墓内部の側から土砂が積み上げられている。旧墓土があり、高さ2.1m、幅13.5mと計測された(1965年撮影)

配石のある墓坑 (キウス2号周堤墓)

長さ約1mの楕円形の墓坑は、手前側の左右に離れた大型礫の間から検出された。[内部には腐朽した骨格の残存が認められる]と報告された(1965年撮影)



100年以上前にさかのぼる、地域の遺跡保護の歴史

キウス周堤墓群の所在は、明治の終わりに大正の始めに確認されており、1901年に北海道史研究家・河野常吉氏による聞き取り調査が行われ、1912年に「アイヌのチャシ」と記した標柱が建てられました。その後、道庁技手らによる調査が行われ、1930年に史蹟名勝天然記念物保存法にもとづき「キウスノチャシ」として国の仮指定史跡に。1950年の文化財保護法制定に伴って仮指定は解除となりますが、この頃から遺跡はチャンでなく、縄文化の「環状土籠」と考えられるようになりました。1964〜65年の千歳市による発掘調査でそれが裏付けられ、1968年に「キウス環状土籠群」として遺指定の史跡に、1979年には「キウス周堤墓群」と改称し国指定の史跡となりました。地域の人も早くから遺跡の価値を認識し、広大な敷地の草刈りや樹木処理を行なうなど、代々大切にしてきました。多くの人々による研究調査と保護の積み重ねがあって、キウス周堤墓群は開発などを免れ、今も縄文時代の墓地在現存する稀有な地景が見られるのです。

公開・活用状況



遺跡の保護のため周堤への立ち入りを禁止し、周りに剪草エリアを設置している。また、史跡の価値や魅力を伝えるため、民間団体「キウス周堤墓群を守りたがひ会」によるボランティアガイド(参加無料)を実施(詳しくは一歳市のホームページをご確認ください)



※遺跡へのアクセスはP62参照

北海道埋蔵文化財センターの常設展示では、旧石器時代から江戸時代にかけての千歳の歴史や文化を紹介し、キウス周堤墓群のコーナーは1964・1965年の発掘調査について詳しく解説している。写真は縄文時代前期の貝塚の構子を展示

千歳市埋蔵文化財センター

北海道千歳市長都 42-1
TEL / 0123-24-4210
開館時間 / 9:00 ~ 17:00
休館日 / 土曜・日曜(第2日曜除く)、祝日、年末年始(12月29日~1月3日)

縄文から見える現代の暮らし

水に育まれた交通の要衝

ウス川など多くの河川が流れ、支笏湖を源流とする千歳川はこの湿地帯に流れ込み、日本海へ注ぎます。人々は日本海から回帰するサケ・マスをはじめ、眼前の湖沼や湿地に生息する魚介類、背後に広がる広葉樹林の恩恵を受けて生活していました。

また、周堤墓群の南、現在の新千歳空港付近の標高25m前後の台地は太平洋と日本海を分ける分水嶺となっていて、近くから流れ出る美々川や美々川はウトナイ湖を経て太平洋へと注ぎます。この周堤は古くから日本海と太平洋を結ぶ交通路となっていて、太平洋側から来た人は勇払川を舟でさかのぼり、美々川などを経て一度上陸し、再び千歳川に舟を下るし日本海へ向かい



なぜここに周堤墓群がつくられたのか、キウス周堤墓群は今も謎に包まれています。周堤の地形をたどると、縄文から現代へのゆるやかなつながりが見えてくるようです。周堤墓群のある馬追丘陵の西部の縁は、周堤墓だけでなく多数の遺跡が見つかっています。付近はチャシ川、キ

ました。このルートは「ユウフツ越え」「シコフ越え」と呼ばれ、江戸時代の松浦武四郎の著作にも記述が残っています。縄文の人々もカヌーに乗っていましたが、このルートを通ったかもしません。周辺一帯は、縄文時代から川を中心とした交通路と生活を支える環境があり、そこから東西南北をつなぐ交流が生まれ、だからこそ重要な遺構が集まって築かれたのかもしれない。

現在、千歳市周辺は新千歳空港をはじめ、鉄道や高速道路、国道などが交差し、北海道大動脈の交通の要衝となっています。その発展の礎には、縄文時代から築き上げる人々の営みがあったのではないのでしょうか。

▲北正時代のキウス周堤墓群周辺地図(●は遺跡を示す/陸地埋蔵品発掘の5万分の1地形図「漁」(大正9年発行)「速分」(大正10年発行)を千歳市教育委員会が複製加工したもの)

【関連資産】

鷺ノ木遺跡

【所在地】北海道茅部郡森町字鷺ノ木町
 (N42° 11'50" E140° 52'66")
 【史跡指定】2006 (平成 18) 年 1 月 26 日

ステージIII a 4000 年前 (2000BCE)
 (遺跡年代:縄文後期 4000 年前)



集落展開のステージ

【ステージIII 定住の成熟 IIIa 共同の祭祀場と墓地の進出】



集落は小規模となり分散
 集落外に共同の祭祀場と墓地进行構築、維持・管理

遺跡の立地



【内陸の河川付近にある標高 70m の河岸段丘上】

駒ヶ岳を望む北海道最大の環状列石

内浦湾沿岸から約1km内陸の河岸段丘上にある、北海道最大規模の環状列石（ストーンサークル）を伴う祭祀遺跡です。江戸時代に噴火した駒ヶ岳の火山灰に厚く覆われていたため、全体が良好な状態で保存されています。環状列石は外周約37m×34mのほぼ円形で、外側に二重にめぐる環状の配石と、中心にある楕円形の配石で構成されています。平均30～40cmの扁平や棒状の石が多く用いられ、その数は約600個。石の供給地は約1km離れた桂川河口付近と考えられています。その周辺には、堅穴のなかに7基の土坑墓ともなう墓域があります。

環状列石がつけられた台地からは駒ヶ岳を望むことができ、当時の人々の自然に対する考え方や信仰をうかがうことができます。

ポイント1

河岸段丘上にある共同墓地を伴う祭祀・儀礼の空間で、周辺に他の環状列石がないため、広域にわたる複数の集落によってつづられ、維持・管理されたと考えられます。

ポイント2

北海道最大規模の外周約 37m × 34m の環状列石、堅穴墓域、配石遺構からなる祭祀遺跡です。

ポイント3

前ステージ (IIb) の拠点集落が寒冷地化によって小規模・分散し、集落外に共同墓地を含む祭祀場が現れました。この後のステージ (IIIb) では、さらに墓地が分離していきます。

集落の立地と生業の関係



内浦湾に注ぐ桂川の河口から約1km内陸に位置し、桂川の支流である上毛無沢川と下毛無沢川に挟まれた、標高 37～73m の平らな台地に立地しています。上毛無沢川沿いには、鷺ノ木遺跡以外にも住居跡やさまざまな遺物を伴う鷺ノ木 4 遺跡などがあり、川に遡上するサケ・マスや周囲に広がる落葉広葉樹の森から、いろいろな食料を調達しやすい環境だったことがわかります。

自然資源を利用した生活

駒ヶ岳を望む台地まで運ばれた河口の石



鷺ノ木遺跡と駒ヶ岳

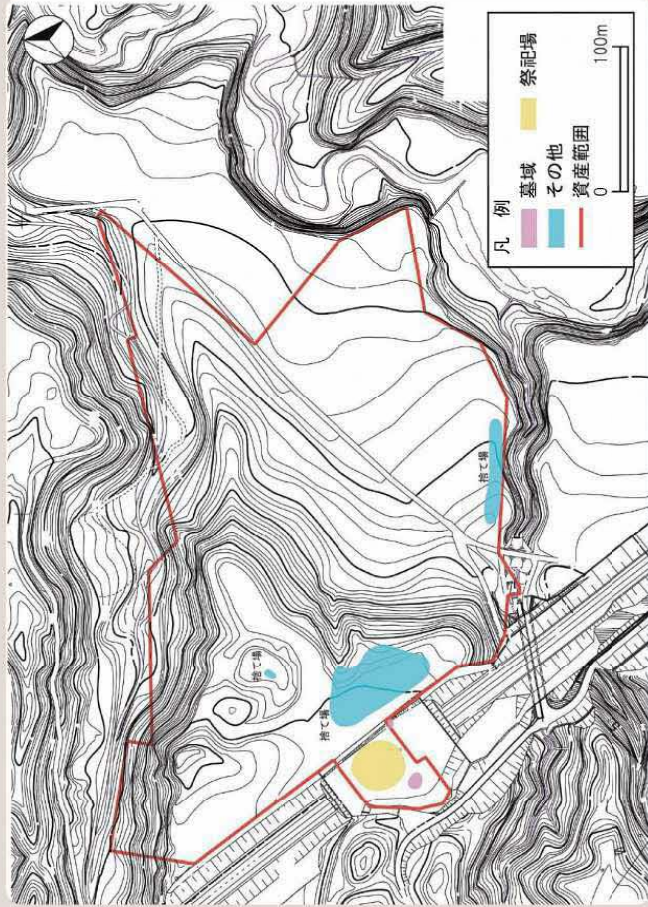
環状列石がつけられた台地から、約13km東に駒ヶ岳があり、立冬には環状列石から駒ヶ岳山頂に昇る朝日が見える

桂川

約1km離れた桂川河口付近に、環状列石と同じ種類・形状の石が見られる



顕著な普遍的価値 (OUV) に関わる遺構の概念図



環状列石から南5mの場所に竖穴墓域があり、大きさ11.6m × 9.2mの竖穴の中に、7つの土坑墓と供献物や墓標を設置する穴がつけられました。集落とは離れた場所に、大規模な共同祭祀場・共同墓域が現れ、祭祀・儀礼を行う場所だったと考えられます。

祭祀・儀礼にみられる精神性



環状列石全景

環状列石の周囲には集落跡が見つかっておらず、ふだんの生活の場所と離れた丘の上につくられたと考えられる



配石

外側は石の長軸方向を連ね、内側は長軸方向を中心に向けて配置するなど、規則性に違いがみられる

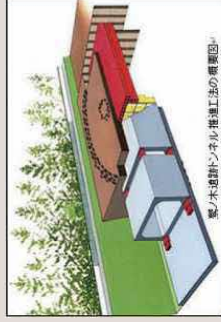
竖穴墓域

竖穴建物跡に似ているが、柱の穴や戸の跡がなく、竖穴は墓として掘られたと考えられる



遺跡保存のために最新技術を駆使

鷲ノ木遺跡は2002年の道央自動車道建設工事に見つかり、翌年に環状列石と竖穴墓域が発見されました。工事を行うNEXCO東日本と北海道、森町教育委員会が遺跡保存に向けた協議を行い、特殊な工法によりトロンネルが整備されました。



遺跡は移設せず、トロンネルの上に保存されている。トロンネル掘削は一部が手掘りで、完成に1年かかった



完成した鷲ノ木遺跡トロンネル (図、写真提供: NEXCO 東日本)

TOPIC

公開・活用状況



森町遺跡発掘調査事務所に、鷲ノ木遺跡のジオラマや出土品を展示しています。鷲ノ木遺跡の現地は、息災会開催時のみ公開しています (開催情報は、森町のホームページでお知らせします)。

森町遺跡発掘調査事務所

北海道茅部郡森町森川町 292-24
TEL / 01374-3-2240
開館時間 / 9:00 ~ 16:00
休館日 / 土曜、日曜、祝・休日、年末年始 (12月30日~1月5日)

※遺跡へのアクセスはP62参照

縄文時代から見える現代の暮らし

縄文時代から続くシンボル、駒ヶ岳とイカ

鷲ノ木遺跡の環状列石の石は、その形状からみて桂川河口から運んできたと考えられます。河口周辺には、もっと近くに平らな場所があるにもかかわらず、なぜ1kmも離れた高台まで石を運んだのでしょうか。

現在、森町を含めて内浦湾周辺に住む皆さんにとって駒ヶ岳はシンボリックな存在です。山頂の冠雪を見て冬の到来を感じたり、山にかかると雲で天気予想したり、ほかの町から帰るとホッと落ち着くこともあります。

縄文の人々にとっても駒ヶ岳は重要な存在で、その姿が美しく見える場所だからこそ、この場所を祭祀・儀礼の地に選んだのかもかもしれません。鷲ノ木遺跡の環状列石から駒ヶ岳をのぞむと、春分・秋分の日が昇り、その後だんだんと位置をずら

し、立冬のころ (11月上旬) には山頂から日が昇ります。当時の人々は季節の移ろいを自然の中から読み取っていたのかもしれません。

大湯環状列石と黒又山、大森跡山遺跡と岩木山など全国で多くの類似例が見られ、当時の普遍的な世界観を象徴するものと考えられます。

もう一つ、森町の特産品として有名な「いからめし」によく似た遺物が鷲ノ木4遺跡から見つかっています。中が空洞になった縄文土製品と呼ばれるのも一種で、イカ形は森町でしか出土していません。道南は今もイカの水揚げ全国トップレベルを誇りますが、縄文時代にも、大切な食料資源だったことが推測されます。



鷲ノ木遺跡から見た立冬 (11月8日) の駒ヶ岳山頂の日の出 (カジミール3Dを用いて作成)



鷲ノ木遺跡・鷲ノ木4遺跡の縄文土製品。祭祀・儀礼の道具と考えられる

北東北の構成資産、関連資産

北東北には11の構成資産と、1つの関連資産があります。

おおいやまもと

大平山元遺跡 | 青森県外ヶ浜町 ステージⅡa |



縄文時代開始直後の遺跡で、陸奥湾に注ぐ蟹田川沿いの段丘上に立地しています。旧石器時代の特徴をもつ石器とともに、土器と石器が出土しました。土器は重く割れやすく、移動に適さないため、土器の出現は定住の開始を示すと考えられています。旧石器時代の遊動から、縄文時代の定住へと生活が変化したことを知る上で重要な遺跡です。

◀約15000年前、北東アジア層古獣の土器片。煮炊きのあとが残っている

たごやの

田小屋野貝塚 | 青森県つがる市 ステージⅡb |



海進期に形成された、古十三湖に面した貝塚を伴う集落跡。集落には、竪穴建物、墓、貯蔵穴、捨て場などの多様な施設が配置されています。貝塚からは、汽水湖にすむヤマトジミをはじめ、魚骨やイルカやクジラの骨、ベンケイガイ製の貝輪（プレスレット）の未製品が多数出土し、集落内で貝輪の製作が行われていたことを示しています。

◀ベンケイガイ製の貝輪未製品

よまつもり

二ツ森貝塚 | 青森県七戸町 ステージⅡa |



太平洋に続く小川原湖に面した段丘上にある、大規模な貝塚を伴う集落跡。貝塚は下層にハマグリなどの海水性、上層にヤマトジミなどの汽水性の貝殻が堆積し、海進・海退による環境変化に適応して生活していたことがわかります。動物の骨や角でつくられた骨角器も多数出土し、なかでもシカ角製櫛は高い精神性と加工技術を伝えています。

◀下層はハマグリ、マガキ、ホタテ、上層はヤマトジミなどが堆積した貝塚断面

さんないまほやま

三内丸山遺跡 | 青森県青森市 ステージⅡb |



陸奥湾を望む段丘上に立地する、大規模な拠点集落跡。竪穴建物、墓、貯蔵穴、掘立柱建物、盛土など多様な施設が配置されています。膨大な土器や石器、2000点を越す土偶などの祭祀用道具のほか、漁労や狩猟の道具、多種多様な動物や魚の骨、クリ・クルミなどの堅果類が出土し、通年に行ったり自然環境を巧みに利用していたことがわかります。

◀大型掘立柱建物（復元）と大型竪穴建物（復元）

ごしよの

御所野遺跡 | 岩手県一戸町 ステージⅡb |



馬淵川沿いの段丘上に立地する拠点集落跡で、台地中央に墓や祭祀場である盛土があり、その周囲に居住域が広がっていました。墓域は複数の石を組んだ配石遺構があり、その外側に掘立柱建物があります。盛土遺構からは大量の土器や石器とともに、焼けた動物骨や堅果類などが出土し、火を用いた祭祀がくり返り行われていたことを伝えています。

◀黒ムラの土屋居住居（復元）

こまきの

小牧野遺跡 | 青森県青森市 ステージⅡa |



八甲田山西麓に広がる台地上に立地する、環状列石を主体とする祭祀遺跡。環状列石は中央帯、内帯、外帯の三重で、一部四重になり、全体で直径55m。内帯と外帯は、楕円形の石を縦・横に複雑に配置して円環が形成されています。土偶やミニチュア土器、400点を越える三角形岩板などの祭祀遺物が多数出土しています。

◀環状列石（第1号特殊組石）

いせどうたい

伊勢堂岱遺跡 | 秋田県北秋田市 ステージⅡa |



米代川近くの段丘上に立地する祭祀遺跡。遠方の山並みを一望する段丘に4つの環状列石が隣接して配置され、最大のもは直径約45mに及びます。周囲からは土偶や錐形土製品、岩版などの祭祀遺物が多数出土しました。周辺には環状列石が確認されていないため、広域にわたる複数の集落によって構築、維持、管理されたと考えられています。

◀唯一完全に復元できた版状土偶

おおゆ

大湯環状列石 | 秋田県角館市 ステージⅡa |



大湯川沿いの段丘上につくられた、2つの環状列石を主体とする祭祀遺跡。周囲に掘立柱建物、貯蔵穴、土坑墓などが同心円状に配置され、土偶や土版、石棒などが多数出土しています。2つの環状列石の中心の石と、「日時状組石」を結んだ線が夏至の日没方向と一致するため、太陽の運行を意図して構築されたとする意見もあります。

◀万座環状列石（右）と野中堂環状列石（左）

おれもりかつやま

大森勝山遺跡 | 青森県弘前市 ステージⅡb |



岩木山麓の丘陵地につくられた、大規模な環状列石を伴う祭祀遺跡。環状列石は、盛土の縁辺部に77基の組石を配置し、長さ48.5m、短径39.1mのやや楕円形につくられています。祭祀用の道具とみられる円蓋状石製品が約250点出土しました。周辺には環状列石がないため、広域にわたる複数の集落によって構築、維持、管理されたと考えられ、精神文化の発達を示しています。

◀環状列石と岩木山。冬至には山頂に太陽が沈むとされる

かめがおか

亀ヶ岡石器時代遺跡 | 青森県つがる市 ステージⅡb |



海進期に形成された古十三湖に面した、大規模な共同墓地。台地上に多数の墓があり、周囲の低湿地には捨て場が形成され、塗彩土器や漆器、玉類など芸術性豊かな副産品が多数出土し、精緻で複雑な精神性を示しています。なかでも大型土偶（国指定重要文化財）は、眼の表現が「遮光器土偶」の名称の起り点となつて知られています。

◀1887年に出土した、大型遮光器土偶

これかわ

是川石器時代遺跡 | 青森県八戸市 ステージⅡb |



中居、一王寺、畑田の3つの遺跡からなり、なかでも中居遺跡は竪穴建物、水場、捨て場など多様な施設があり、土器や土偶のほか、漆製品が多数出土しました。弓やヤスなどの木製品、クリ・トチなどの堅果類、シカやイノシシの骨、魚骨のほか、貯木やトチなどのあな抜きに使ったと思われる水場もみつかかり、当時の採集・漁労・狩猟の様子を伝えています。

◀漆塗りの木製容器。発掘直後は鮮やかな赤色をしていた

ちようしちやち

「関連資産」長七谷地貝塚 | 青森県八戸市 ステージⅡb |



海進期に形成された古奥入瀬湾の沿岸に立地する貝塚を中心とした集落跡。貝塚からは暖かい海にすむハマグリをはじめ、大量の貝殻やスズキやクロダイなどの骨、角骨の釣針や銚頭が多数出土し、漁労が活発だったことがわかります。貝塚は温暖化により海面が上昇した海進期につくられ、当時の人々が環境に適応しながら生活していたことを示しています。

◀銚先（左3点）と軸と針の組合せ式の釣針（右3点）。漁労活動の本格化を示す

世界遺産をガイドするために

縄文遺跡の多くは地中に保存されているため、直接目で見ることができません。その価値を伝えるにはガイドの役割がとても重要になります。また、複数の資産によって価値を証明する（シリアル・プロパティーズ）縄文遺跡群の場合、OUVを示す全体のストーリーのなかで各資産を説明しないと世界遺産としての価値は伝わりません。ガイドにあたっては、個々の資産だけでなく、構成資産すべての流れを念頭に置くことが大切です。なお、近年のガイドのあり方としては、一方の解説ではなく「対話型」のガイドが求められています。

世界遺産のガイドのあり方

1. 目に見えない価値を伝えるために

ギリシャのパルテノン神殿や、日本の姫路城など、今でも建物が残っている資産は、見るだけで「大きい」「きれい」など資産の価値を直接感じることが出来ます。

しかし、縄文遺跡の遺構や遺物は、ほとんどが地中にあり、人々が生活をしてきた「本物」の建物などを見ることができないため、その価値をイメージすることが難しい資産です。

こうした性質を持った縄文遺跡においては、その価値を説明し、適切に伝えていくためにガイドの力が欠かせないのです。

2. シリアル・プロパティーズの解説に必要なこと

縄文遺跡のように見ただけではわかりにくく、精神性など抽象的なことも説明する場合、それぞれの思い込みや意見、断片的な知識を話してしまいがちです。その結果、ガイドごとに異なる説明となり、案内したグループによって理解に齟齬が出たり、リピーターは前に説明されたことと違うと戸惑ってしまいます。ガイドの中で統一されたストーリーを共有することが必要です。

世界遺産としての価値と内容の理解

複数の資産で価値を証明するシリアル・プロパティーズの場合、全体のストーリーの中で語らないと、世界遺産としての価値は伝わりません。「北海道・北東北の縄文遺跡群」が評価されたのはどのような点なのかを踏まえて、地元の遺跡を解説できるようにします。本冊子の12～17ページでは、「世界遺産としての価値」の説明をくわしく載せています。

想像が働くようなガイディングを工夫

ガイドの際には、見学者が想像力を働かせることができるよう、遺物など“見える”ものから当時の人間の姿を描くようにします。

たとえば、函館市「垣ノ島遺跡」で出土した、子ども足形の付いた土板（足形付土板）は当時の親の子どもへの愛情を伝えています。それは現代の私たちも共感できるものです。ガイドでは、遺跡そのものの説明だけでなく、縄文の人々と現代の私たちがつながるようなポイントを見つけて、想像をかき立てる工夫も大切です。

3. 多様な見学者に対応するために

世界遺産となった遺跡には、さまざまな地域から多様な興味関心を持った見学者が訪れます。世界遺産だからとにかく見に来た人、縄文化というより土偶が好きな人など、必ずしも遺跡そのものに関心がある人ばかりではありません。一方で、深い興味と知識を持って訪れる人もいます。どんな人にも同じように解説してしまおうと、見学者を疲れさせたり、飽きさせたりしてしまいます。また、相手が関心を示さないことを延々と話し続けるのは、ガイド自身にも負担になります。

「対話型」のガイドを目指す

見学者がどの程度の興味や知識を持っていて、どのくらい説明したら良いのかを探るためにも「対話」が重要です。とくに、海外からの見学者の場合は「対話型」のガイドを求めています。

対話型のガイドとは、相手から問いを引き出すガイドのことです。「知らないことを教えてあげる」というスタンスではなく、「対話」する中で相手が気づいたことをとらえ、ガイドしていきます。

見学者は、ガイドからの一方的な言葉より、自ら疑問や関心を持ったことへの説明を求めています。ガイドは、対話しながら、説明を始めるきっかけの言葉が相手から出るよう誘導します。海外からの見学者なら、日本や北海道に来たときの印象から始めてもいいかもしれません。相手のなげない一言をきっかけに、縄文時代から現代

につながる自然環境の説明まで発展させることも可能です。対話が主で、合間に「学び」があるというガイドの仕方を目指していきます。

見学者に合わせてガイドを心がける

対話型のガイドは、見学者がなにを求めているのかを知るためにも有効です。世界遺産だからとにかく来てみたのか、それとも縄文化への高い関心があり知識を持って来ているのかを、対話する中で探ることが出来ます。そして、関心や知識のレベルが違えば見学者を同じようにガイドするのではなく、それぞれのレベルに合わせて内容を決めます。簡単にわかればいいという人には広く浅く、関心や知識がある人には深く掘り下げてというふうに、見学者のレベルを見極めて対応することを心がけます。



ガイドと地域の連携について

1. ガイドに求められること

遺跡を含めた地域全体での連携

見学者の中には、世界遺産だけでなく遺跡のある地域の文化や産業などについて知りたいと思う人も多くいます。地元の人にはとくに珍しいことでも、訪れる人にとっては非日常の体験であり、地域らしいものに触れることを求めています。そのような見学者に、遺跡の外にも誘導して地域の文化に触れる機会を提供するためには、遺跡を含めた地域全体で連携をとることが重要です。

地形や気候などの自然環境は、縄文時代から暮らしの基盤となり、現代の地域の産業を生み出しています。ガイドは、遺跡のある地域のことも学び、縄文と今がつながっていることを伝えられるようにします。

地元以外の構成資産について学ぶ

構成資産は、北海道内だけでなく道央から道南まで5つの市町に分散しており、見学者はそれぞれの遺跡の関わりが把握しづらいと言えます。ガイドは、地元の遺跡が「北海道・北東北の縄文遺跡群」という大きな枠組みのどの部分にあたるのか、定住ステージに沿って説明する必要があります。

とくに、北海道の場合は1つの地域としてとらえられ、「世界遺産なのだから、どこのガイドも知っているだろう」と、別の遺跡に関する説明を求められることも考えられます。

ガイドは、地元の遺跡だけでなく、ある程度の構成資産全体の知識が必要です。

2. 地域のサポートが必要なこと

ガイドの体制づくり

対話型ガイドの実技講習会や、統一したストーリーづくりのための資料提供、有識者による定期的な遺跡に関する講習や研修会などを実施し、ガイドの体制を整えていきます。また、ガイドの質を保つために、適性を見極める機会を設けます。

将来的には、ボランティアガイドから有料ガイドへとシフトさせていくことで、責任感が生まれモチベーションが上がります。ガイドのレベル向上が期待できます。

ガイドのバックアップ体制づくり

ガイドでは難しい専門的な質問にも対応できるよう、教育委員会や学芸員などのバックアップ体制が必要です。海外からの見学者への対応としては、海外事情に慣れた人材と連携し、縄文文化や歴史用語の訳方も含めて共有しておきます。

また、有料ガイドにシフトするには、ガイドが自信を持って取り組める体制づくりが重要であり、統一されたストーリーに基づきガイドマニュアルの作成などが必要です。



地域全体の受け入れ体制づくり

世界遺産の地として、ガイドだけでなく市民も海外からの見学者に対応できることが望ましいと言えます。外国語ができなくても可能なコミュニケーション方法として、たとえば、指差し外国語会話のカードの配布などが考えられます。ガイドを地域全体でサポートし、世界中から訪れる人を迎える体制を作ることが求められます。

世界文化遺産のガイドの仕方について ～海外見学者への対応例から～

英語通訳案内士 遠藤 昌子さん

北海道内と東北地方を中心に全国で毎日密のガイド業務にあたる。米国ツアーで縄文遺跡を案内した事がきっかけで、縄文文化に強く興味を持つ。英語通訳案内士対象の縄文遺跡研修で2021年度講師を務めた。

木の文化である日本は、石の文化である西欧のように、遺跡に多くの遺物が残っていません。縄文遺跡のガイドは、見えないものを伝えなくてはならない難しさがあります。相手が海外からの見学者なら、なおさらそうでしょう。私の場合は、想像力を働かせることのできるポイントを見つけて、この地で生きていた人間の姿を描くように心がけています。たとえば土器を見て、手がどう動いていたか観察してもらいます。爪の跡が残っていることに気づくと、「これを作った人が誰かにいた」と感じることもでき、さくらに「縄文人は爪をどうやって切っていたのだろう？」などという想像が、問いを発するきっかけになります。また、儀式に使われたと思われる多様な美しい土製品の説明をして、自然の素材を用いた高度な技術から、自然とのつながりを重視した縄文の精神性を肌で感じてもらうことができます。そして、その精神性は今の日本に生きる人々の中に

ガイドのおもな流れ

対話型ガイドの流れの一例をご紹介します。

1 あいさつ

歓迎の言葉と、親近感を持っていただくための自己紹介も効果的。

例：「みなさん、こんにちは。ようこそ世界遺産の【遺跡名】へ。本日もご案内いたします。【ガイド団体名】の【自分の氏名】と申します。よろしくお願いたします」

2 見学者の情報を収集・適切なガイド内容を推測する

見学者が質問しやすい雰囲気を作るために、どこから来たのか、海外の場合は国名などを聞く。縄文文化について知っていることなど簡単な質問をして、世界遺産や縄文遺跡への関心度を推測する。

例：「北海道・北東北の縄文遺跡群には他にどんな遺跡があるか、ご存知ですか?」「北海道の縄文文化（遺跡）についてご存知ですか?」「縄文遺跡にはどのような関心をもっていらっしゃいますか?」など

3 ガイドコースを説明

ガイド間で統一したストーリーを伝える。その上で、どんなものが見られるか、遺跡は縄文文化のどのステージにあたるかなど見学者に合わせて説明する。

例：「世界遺産登録された北海道・北東北の縄文遺跡群は17の遺跡で構成されています。それぞれ6つのステージに当てはめられていて、この【遺跡名】は【OSSステージ】の遺跡です。このステージの特徴は～（以下、統一したストーリーを語る）」

※必要な場合は、定住ステージの図（P14～15）を示すなど、ペースとなる知識を説明する

4 対話しながらガイド

遺跡内の移動中に縄文時代や北海道の基本情報を提供しつつ、見学者に問いかけけるタイミングも織り交ぜる。解説は3～5分程度に区切る。

例：「みなさん、縄文時代は今より気温が高かったのはご存知ですか?何度くらい高かったと思いますか?（見学者とのやり取りを行う）正解です!今より〇度も高かったころは、海岸線がここまで来ていたんですよ」「イギリスにもストーンヘンジという現状列石に似たような遺跡がありますが、こんなな離れた日本にも、似たような遺跡があることは興味深いと思いませんか?」など

5 まとめ

一番伝えたいストーリーを再度まとめて伝え、見学者の感想を聞いたり、疑問にぶちまけたりする。

例：「最後にまとめますと、この遺跡の特徴は〇〇という点です」「縄文時代へのイメージは、最初とどう変わりましたか?」など

6 お礼の言葉で締めくくると

他の構成資産についても触れて、周辺へ興味をもたせるように促す。見学者から他の構成資産について質問が出た場合は、簡単に特徴を説明する。

例：「北海道内には、【遺跡名】のほか、5つの構成資産の遺跡と1つの構成資産があります。興味を持たれましたら、ぜひ足を運んでみてください。さらに青森、岩手、秋田の遺跡を見ていただくと、より北海道・北東北の縄文遺跡群について理解が深まると思います」「【他の遺跡名】は〇〇が見どころです」「ご案内はここまでです。本日はお付き合いいただき、ありがとうございました」「ぜひ、また【遺跡名】にお越しください。お目にかかるとのを楽しみにしています」など

世界文化遺産「平泉」でのガイド活動について

平泉町 八重樫 忠郎さん

1985年、平泉町教育委員会文化財センター文化財調査員。2002年、平泉町世界遺産推進委員長補佐としてガイド育成に携わる。現在、平泉町観光商工課課長。著書に『シリーズ「遺跡を学ぶ」101.北のつわもの都・平泉』（新泉社）など。



世界遺産からなにを発信するか

平泉町では、2002年に世界遺産推進室を設置、その翌年「古郡ひらさみガイドの会」を立ち上げ、ガイド育成が始まりました。それまで各所で行われていたガイド活動は、たとえば、中尊寺などの建造物や奥州藤原氏の歴史について説明することが中心でした。しかし、世界遺産のガイドでは、それだけでなく世界中の人々が理解し納得できる価値を伝えるにはなりません。「世界遺産からなにを発信するか」は、とても重要です。そこで、世界遺産を持つ人類の未来に発すべきメッセージを、すべてのガイドが共有することになりました。

平泉のメッセージは、「生きとし生けるものの平等と平和」です。戦乱の世ののち東北地方を治めた奥州藤原氏は、仏教に基づいた理想の世界を作ろうと、中尊寺などの寺院を建立し、国づくりを行いました。すべての人々にとって平等で平和な世の中の実現は、世界的に不均衡な状況が広がる現代へのメッセージになり得ます。これは、縄文化が持つ、自然と共生する精神の延長線上にある思想とも言えます。先人から遺されたものが今に生きる私たちとどうつながるのか、当時の生活や精神性が現代にどう生きていくかを伝えることが、世界遺産のガイドには必要だと思えます。

統一したストーリーの共有

メッセージを伝えるには、統一されたストーリーづくりが欠かせません。内容が抽象的であるほど、ガイドがそれぞれ思い入れや個人的な意見で説明してしまいがちだからです。「ここだけは統一しよう」というポイントを決めて共有しておく、ガイドによって全然違うことを説明してしまうということがなくなります。平泉では、周辺地域の世界遺産にならなかつた史跡のガイドともストーリーを共有しています。理想郷の思想の核として平泉があり、

周辺地域はその理想郷づくりを支えています。そうした役割をはっきりさせることで、見てわかりにくい史跡も理解しやすくなります。「北海道・東北の縄文遺跡群」も、各遺跡が縄文文化という大きな核のどの部分を支えているのか、論理的に説明することが求められると考えます。

地域を知り、その価値を知る

なにより大事なことは、世界遺産の地にある自分たちが、自らの地域を知って自信を持つことです。「遺跡を見たってなにもない」と思ったことがあるかもしれません。だが、「なにもない」、これはマイナスではありません。だからこそ、訪れた人はイメージをぶくぶくさせることができます。そして、イメージさせるようにガイドするためには、遺跡だけでなく地域が持つ価値を知ることが必要です。世界遺産になったのは、先人からずっと地域の文化や資源を守ってきた結果であり、それらに触れたという人々が訪れます。ですから「こんなところまで人が来るはずがない」と自ら否定しないようにしていただき。それに、訪れる人にとって距離はまったく問題ではありません。どんなに遠く離れた遺跡でも、北海道の豊かな自然を楽しみながら巡ろうとします。

何度も訪れたいと思う場所へ

世界遺産登録の当初は、なにもなくとも多くの人がやってきますが、一過性ではなく、継続して何度も訪れたいと思える場所にしていくという、大きな役割をガイドは担っています。「北海道・東北の縄文遺跡群」は、世界遺産という一色あせることのない大きな勲章を得ました。今後、北海道ともつながりが深い「平泉」と、ガイドによって連携できるようなことを期待します。

縄文遺跡群の保全について

人類共通の財産である世界遺産となった縄文遺跡群の保全は、「法で守る」「人で守る」の二段階で構成されています。

基本は、「法で守る」しくみ

縄文遺跡群はすべて先史時代の考古遺跡であり、それらの価値を示す要素の多くは地下に埋蔵され、良好な状態で保存されています。各遺跡は「資産（プロパティ）」と「緩衝地帯（バッファゾーン）」の2つから成り、この良好な状態を守るために、以下が行われています。

- 資産の範囲は、「文化財保護法」に基づく史跡、または特別史跡に指定され、現状をわずかも変更する場合は文化庁長官の許可が必要であるなど、法的に厳重に保護されています。
- 緩衝地帯は、「景観法」に基づく景観計画上の景観重点区域等に指定され、建物などの開発行為に関して届出・勧告による規制を行うとともに、建物などの形態・色彩・意匠などに関する変更命令を出すことができ、良好な景観の保全を図っています。

北海道・東北の縄文遺跡群全体の保存・管理においては「包括的保存管理計画」を策定し、その推進体制として、関係地方公共団体の長などを構成員とする「縄文遺跡群世界遺産本部」を設置し、さまざまな取組を進めています。

大切なのは、「人で守る」取り組み

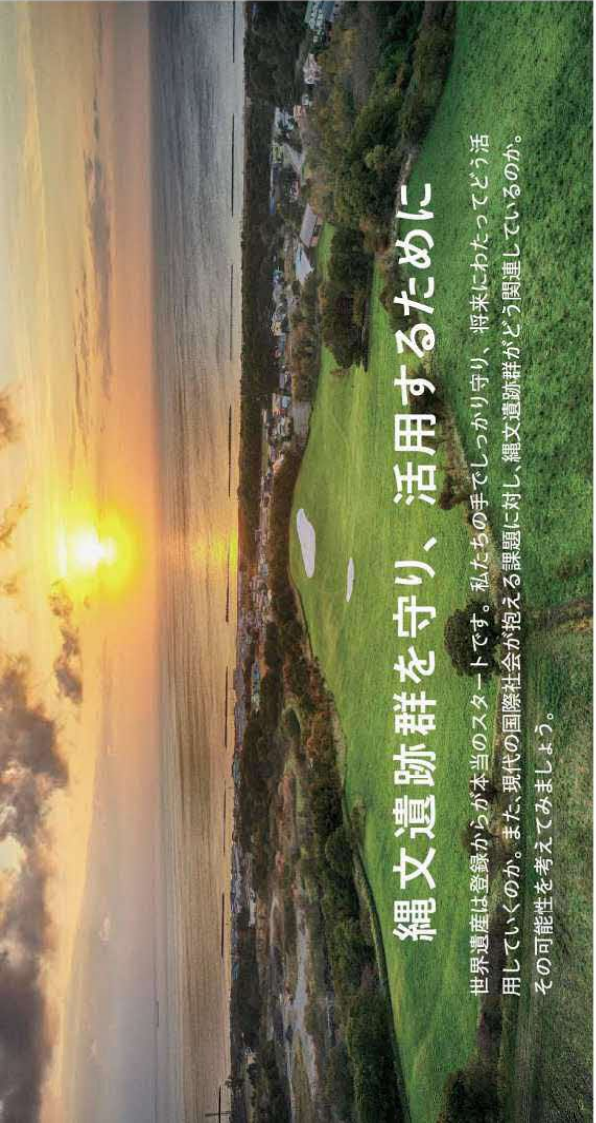
世界遺産を保全するときに一番大切なことは、地域のみならず、世界遺産を「自分たちの宝」として誇りに思い、自ら守っていくこうとする取組です。これが「人で守る」ということです。

資産と周辺環境を継続的に保全するためには、地域社会が主体的に資産の保存・活用に関わることが欠かせません。そのため、世界遺産登録が決定する以前から、各地で地域住民や遺跡関係団体が積極的に参加できる体制づくりが進められ、次のような活動が行われてきました。

- 解説ガイドによる価値の伝達
- 体験プログラムやイベントの企画運営
- 来訪者に向けたさまざまな情報発信
- 清掃・草刈りなどの日常的な維持管理
- 情報発信や保全活動に関わる人材の育成 など

こうした活動は今後さらに重要性を増し、その積み重ねが来訪者の理解を深め、保護意識を醸成し、資産の継続的な保全につながっていきます。





縄文遺跡群を守り、活用するために

世界遺産は登録からが本当のスタートです。私たちの手でしっかり守り、将来にわたってどう活用していくのか。また、現代の国際社会が抱える課題に対し、縄文遺跡群がどう関連しているのか。その可能性を考えてみましょう。

世界遺産を活用したまちづくり

世界遺産登録の本来の目的である、文化遺産の保全体制を確立するには、地域コミュニティ（住民、企業、学校、関係機関・団体など）や地方自治体の人々が主体となり、遺産の価値をふまえて適切に活用されることが大切です。

とくに重要となるのは、子どもたちへの世界遺産教育活動や地域コミュニティとの結びつきです。そうした活動によって地域を愛する心が醸成され、遺産の保存・活用に対する地域住民、民間団体などの参画が促進され、世界遺産保護の機運が育まれます。

世界遺産登録による知名度向上や地域の魅力増進の結果、インバウンドを含む来訪者の増加や経済の活性化が見込まれます。遺産の保存・活用に配慮した来訪者管理を行うことで、遺産の持続的な活用が可能となります。

また、来訪者の増加による経済の活性化は新たな雇用の創出を生み、交流人口・定住人口の獲得など、さまざまな地域の課題の解決にもつながる可能性ももっています。世界遺産の持続的な保存・活用は、ひいては地域社会の持続性に寄与するといえます。

地域社会における世界遺産登録の効果

文化財行政の視点

世界遺産の価値を地域が共有し、その情報を発信することにより、文化財への理解が広まり、地域全体の文化財の保存と活用が図られる。

教育的な視点

自分たちが生まれ育った地域に、世界遺産になるほど優れた文化があることを知ることにより、郷土を誇り思い愛する心を醸成する。

地域振興の視点

来訪者の飛躍的な増加、特にインバウンドが増えることにより、欧米圏などから、新たなニーズをもった観光層の流入が期待される。

文化財保護の推進

郷土愛の醸成

新たな観光創造

縄文に学ぶ ～持続可能な社会に向けて～

縄文時代の人々は、かつての移動生活から定住生活へと生活スタイルを変え、集団での安定した暮らしを実現しました。人々の間には共同体の絆が深まり、祖先や自然を敬う豊かな精神文化が育まれました。その一方、継続的な食料確保やごみの処理、気候変動といった現代にも通じるさまざまな課題にも直面しました。縄文の人々はそれらにどう対応し、定住生活を発展・成熟させてきたのでしょうか。そういった視点で縄文時代をみてみると、現代の私たちにとって、大切な示唆があることに気付くでしょう。

ユネスコでは2005年からESD (Education for Sustainable Development) 活動を進めています。国際社会には、差別や貧困、紛争、環境破壊などの多くの課題があり、そうした課題を自分ごととして捉え、取り組みすることで、より良い社会を実現しようという運動です。また、国連サミットでは2015年にSDGs(Sustainable

Development GOALS / 持続可能な開発目標) が採択され、2030年の目標達成に向けて世界各国で活動を展開しています。自然資源を持続的に管理・利用し、環境に適応しながら1万年以上継続した縄文時代の価値を学ぶことは、こうした国際的な取組に貢献できる、大きな可能性があるのではないのでしょうか。

地域の「宝もの」を見つめ直してみよう

世界遺産登録をきっかけに、私たちの身近にある文化や自然を見つめ直すことも重要です。地域には、さまざまな価値を持つ大切な「宝もの」がたくさんあります。そのことに気づき、誇りに思う気持ちが生まれると、それが郷土を思う心となって、これからのまちづくりの原動力にもつながっていきます。世界遺産登録のもう一つの意義が、ここにあるといえます。



[ESDの概念図]



[SDGs (持続可能な開発目標)]



北葦金貝塚でのポラリティアイランドによる活動風景 「だて朝火縄文まつり」での火起こし体験



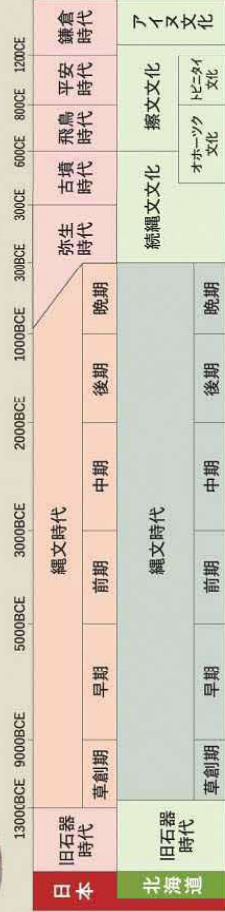
公開中の大船遺跡



キウス周堤墓群の史跡見学会の様子

縄文時代以降の北海道の歴史

縄文時代以降、日本列島の大部分は弥生時代に移り変わります。しかし、北海道では狩猟採集文化の伝統が引き継がれ、その後も本州や北方の大陸の影響を受けた独自の文化が展開していきました。



弥生文化とは異なる縄文文化の始まり

約3000年前、九州北部に大陸の東方や朝鮮半島から稲作が伝わり、青銅器や鉄器をももなう弥生文化が日本列島の大部分に広がりました。そして約2400年前に東北北部まで及ぶと、縄文時代は終焉を迎えます。しかし北海道は、狩猟採集を主とする縄文文化を引き継いだ「縄文文化」に移りました。北海道で稲作が始まらなかったのは、寒冷な気候だけでなく、自然の豊かさから稲作に移行しなかったからだと思います。

縄文文化前半は、地域によって本州の弥生文化や北方の大陸とつながりを持ち、後半は本州の古墳文化との交流が活発になりました。そして、鉄器の流入とともに石器が使用されなくなってきました。しかし、石器には引き続き縄文を施し、縄文文化の伝統を保持し続けました。

大陸がルーツのオホーツク文化と本州の影響を受けた縄文文化

5世紀頃、サハリンから南下してきた人々が道北からオホーツク海沿岸部に定着し、漁労と海獣狩猟を主とした「オホーツク文化」を残しました。彼らは大陸の鉄器文化と関連する鉄器を持つなど、縄文文化とは大きく異なっています。本州に律令国家が成立した7世紀頃、道南部と道央部では「縄文文化」が形成されました。



（宮別市）縄文文化のコハク玉の首飾り (江別市坊主山遺跡)



縄文文化の後式土器 (江別市坊主山遺跡)



オホーツク文化の青銅製帯飾 (後幸町目梨泊遺跡)



縄や高弁などの形状の器状の器状土器 (北見市常呂遺跡)

本州の土師器の影響を受けた土器からは縄文が消え、本州と同じカマド付きの竪穴建物に住み、アワやヒエなどの雑穀農耕も行われたと考えられます。

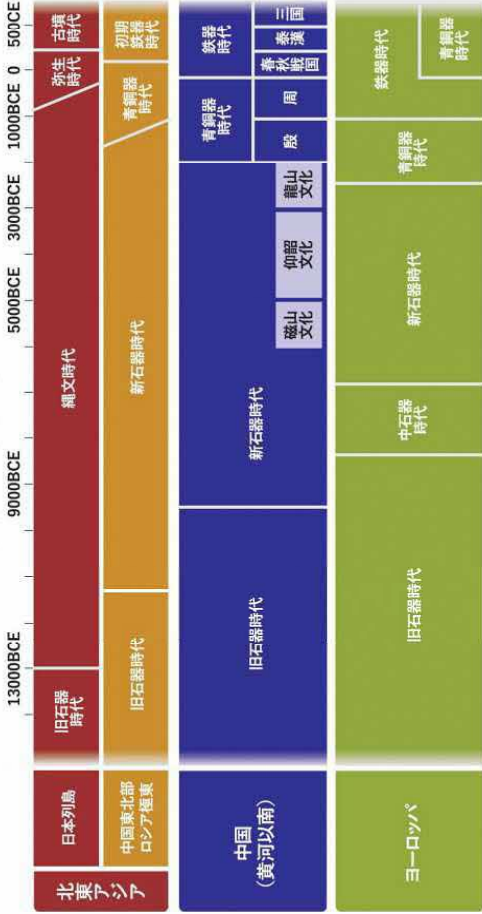
9～10世紀頃になると、擦文人は生活の範囲を北東へ広げ、オホーツク文化の領域だったオホーツク海沿岸部まで進出しました。そして、オホーツク文化と接触・融合した「トビニアイ文化」が誕生し、両方の文化の特徴を兼ね備えた土器や住居が作られました。

独自の歴史と文化を持ち続けた北海道

12～13世紀頃、本州では鎌倉幕府による統治が始まりました。全国的な流通網が整備され、各地の産物が広範囲に流通し始めると、北海道にも本州産の内耳鉄鍋(内側に取っ手のついた鉄鍋)が普及します。そして、縄文時代以来、煮炊きに使われてきた土器が徐々に作られなくなり、竪穴建物から地面の上に建てるスタイルに変化した。考古学上では、このあたりから今につながりアイヌ文化の特徴が見られます。

地図を見ると、北海道は日本海、そしてオホーツク海の内海の環が交差する中にあることがわかります。北東アジアと東アジアという大きな世界の、多様な文化が重なり合う場所に位置していた北海道は、日本という枠組みにとらわれない、独自の歴史と文化を持ち続けた地なのです。

世界の中の縄文時代



北海道・北東北での農耕以前の人類の生活のありかたは、紀元前 (BCE) 13000年頃始まり、紀元前4000年頃まで続きました。この時期は、日本の歴史では縄文時代に区分されます。北東アジアの中国東北部やロシア極東地域では旧石器時代から新石器時代まで、中国大陸部の黄河以南では旧石器時代から春秋戦国時代まで、ヨーロッパでは旧石器時代から鉄器時代および古代ローマ帝国の成立までの幅広い時代に相当します。

定住のステージと世界史の比較

年代	定住のステージ	北海道・北東北、日本のおもなできごと	世界のおもなできごと	北海道・北東北の縄文遺跡群
紀元前 (BCE)	旧石器時代 (移動生活)	・縄石器 (せいせつき) 文化が日本列島に広がる	・フランスでラスコー洞窟の壁画が描かれる	
約 13000 BCE	Ia: 居住地の形成	・土器や弓矢の使用が始まり、定住化が進んでムラが出現する	・トルコで最古の神殿がつくられる (ギョベクリ・テペ遺跡)	大平山元遺跡
約 7000 BCE	Ib: 集落の成立	・気候の温暖化が進み、海水面が大幅に上昇 (縄文海進) となる	・中国の長江下流域で水稲耕作が始まる	・短ノ島遺跡 (縄文海進)
約 5000 BCE	Ila: 集落施設の多様化	・東北北部と北海道南部～道央部を中心に、円筒形の土器を持つ縄文土器文化が成立する	・中東のメソポタミア文明の始まり	長七谷地貝塚 (縄文海進)
約 3000 BCE	Ilb: 拠点集落の出現	・東北北部と北海道南部～道央部を中心に、円筒形の土器を持つ縄文土器文化が成立する	・メソポタミア文明の始まり	北巻貝塚 田小瀬野貝塚 二ツ森貝塚
約 2000 BCE	Illa: 共同の祭祀場と墓地の運出	・大規模な拠点集落が形成される	・インダス文明の始まり	大船遺跡 三内五山遺跡 御所野遺跡
約 1500 BCE	IIb: 祭祀場と墓地の分離	・寒冷化で大規模な拠点集落は減少し、環状列石が出現する	・中東のハビロニアでハンムラビ法典が制定される	入江貝塚 大湯環状列石 伊勢堂岱遺跡 小笠野遺跡 蟹ノ木遺跡 (縄文海進)
約 400 BCE	弥生時代 縄文文化末期	・縄文文化が栄える	・ローマ帝国 (ケイサール) が建設される	キウス環状遺跡 茨砂貝塚 亀ヶ岡石器時代遺跡 是川石器時代遺跡 大森野山遺跡

* 縄石丁 (せいせきじょう) という小型の石器を骨などに装填した狩猟道具を用いた文化

専門用語解説

※五十音順

[世界遺産関連用語]

あ行 **緩衝地帯 (バッファゾーン)**

資産の効率的な保護のために定められる、資産を取り囲む地域のことで、その利用・開発を法的または慣習的に規制することで資産を保護。

い行 **完全性**

世界遺産一覧表に記載されるすべての資産が満たさなければならぬ条件の一つであり、自然／文化遺産とそれらの属性のすべてが損なわれることなく含まれている度合いを測るための指標。

か行 **関連資産**

縄文遺跡群の構成資産ではないものの、顕著な普遍的価値の証明や理解の一助となる資産として位置づけられているもの。他の構成資産と一体的な保存と活用を進めている。

こ行 **構成資産**

世界遺産の価値を具体的に証明するものとして選ばれた資産群。

さ行 **資産範囲**

世界遺産登録地域の範囲。資産の顕著な普遍的価値、完全性、真実性が十分に表現されることを保証しなければならぬ。

し行 **シリアル・プロパティーズ (serial properties)**

関連性のある資産群のこと。ある関連性に基づいて複数の構成資産を一連のものとして扱う資産のこと。

す行 **真実性**

文化遺産が本来備えている価値を示すための指標であり、登録基準に基づいて推薦される資産が満たさなければならない条件の一つである。

世界自然遺産

顕著な普遍的価値を有する、地形や地質、生態系、絶滅のおそれのある動植物の生息、生育地など。2021年時点で1154件ある世界遺産のうち218件が自然遺産。

せ行 **世界複合遺産**

文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えているもの。2021年時点で39件が複合遺産。

た行 **世界文化遺産**

顕著な普遍的価値を有する、記念物、建造物群、遺跡、文化的景観（人類が自然環境を生かしながらつくり上げた固有の文化がみられる景観）などで。2021年時点で897件が文化遺産。

ち行 **包括的保存管理計画**

世界文化遺産の登録推薦に当たり必要となる「世界遺産のための保存管理計画 (management plan)」に対応する計画。

な行 **赤色顔料 (ベンガラ)**

縄文時代には、酸化鉄を原料とするベンガラ（酸化第二鉄）と、辰砂（硫化水銀）を原料とする朱がある。ベンガラには、植物の根や温泉周辺などに沈殿した鉄を起源とする粒状ベンガラと鉄バクテリアのコロニーが起源のパイプ状ベンガラが知られている。

に行 **石鏃**

矢の先端に付けて用いている石製の利器。

ひ行 **常緑広葉樹林**

落葉する時期のない、主として広葉樹からなる森林で、熱帯から暖温帯の雨の多い地域に見られる。

ふ行 **常緑針葉樹林**

トウヒやエゾマツなど落葉する季節がない針葉樹からなる森林で、落葉針葉樹林よりさらに寒冷な地域に分布する。

ほ行 **針広混交林**

針葉樹と広葉樹が混在する森林。

ま行 **捨て場**

食糧残渣や土器・石器などを捨てた場所で、大規模なものが形成されている。祭祀・儀礼に伴うものと考えられる。

間水期

氷期と氷期の間の温暖な時期。

拠点集落

多様な施設を備えた集落。規模が大きく、長期間継続しているものが多い。

屈葬

死者の四肢を折り曲げて葬る方法。

堅果 (けんか) 類

クリ、クルミ、コナラのように堅い果皮を持つ果実。

さ行

祭祀・儀礼

祭祀は、神・自然・祖先など尊い存在に対して崇める行為や祭りのこと。儀礼は、ある集団のなかで日常と区別され、一定の順序・法則のもとに行われるもの。

スクレーパー

物を削ったり剥き落したりするために、急角度の刃を付けた石器。

赤色顔料 (ベンガラ)

縄文時代には、酸化鉄を原料とするベンガラ（酸化第二鉄）と、辰砂（硫化水銀）を原料とする朱がある。ベンガラには、植物の根や温泉周辺などに沈殿した鉄を起源とする粒状ベンガラと鉄バクテリアのコロニーが起源のパイプ状ベンガラが知られている。

石鏃

矢の先端に付けて用いている石製の利器。

常緑広葉樹林

落葉する時期のない、主として広葉樹からなる森林で、熱帯から暖温帯の雨の多い地域に見られる。

常緑針葉樹林

トウヒやエゾマツなど落葉する季節がない針葉樹からなる森林で、落葉針葉樹林よりさらに寒冷な地域に分布する。

針広混交林

針葉樹と広葉樹が混在する森林。

捨て場

食糧残渣や土器・石器などを捨てた場所で、大規模なものが形成されている。祭祀・儀礼に伴うものと考えられる。

すり石

河床礫などを用いた、モノをすり潰すための、球形・棒形の石器。

た行

多様な施設を備えた集落。規模が大きく、長期間継続しているものが多い。

段丘

河川・湖・海などに接する階段上の地形。ほぼ水平で平坦な段丘面と、その周囲の急斜な面段丘崖からなる。

貯蔵穴

食物などを貯蔵するために掘られた穴。

は行

氷期

地球を広く氷河がおおっていた寒冷な時期のこと。

標式土器

縄文時代研究における土器型式を設定するにあたって基準となった土器の資料群。

フラスコ状土坑

断面がフラスコ形の穴（土坑）のこと。

北海道式石冠

凸字形をなし、小さな頭部と平らな底部を持った石器で、北海道南西部から中央部位にかけて分布。堅果類や根菜類を粉砕・製粉するための杵として使われた器具と考えられている。

や行

様式

縄文土器研究においては、縄文土器の形や文様の共通性から、複数の地域的、年代的に連続する型式をまとめたもの。様式の広がりには同じ土器作りを共有する集団の広がりと考えられている。

ら行

落葉針葉樹林

落葉するカラマツ、グイマツ、メタセコイアなどを中心とする針葉樹林のこと。

冷温帯落葉広葉樹林

ブナ、ミズナラ、カエデ等を中心とする冷温帯に分布する落葉広葉樹林のこと。

各遺跡へのアクセス

垣ノ島遺跡

- 函館駅 (JR函館本線) から
 車で約60分
- 至館バス「鹿部」「古部」「楡法華」行き「楡法華」行き「南茅部支所前」で要乗換
 徒歩で約5分 ※「古部」「楡法華」行きは、南茅部支所前で要乗換
- 新函館北斗駅 (JR北海道新幹線) から
 大沼公園IC (道央自動車道) から
 車で約60分 (大沼経由)
- 函館空港から
 車で約40分

北黄金貝塚

- 黄金駅 (JR室蘭本線) から
 車で約20分
- 道南バス「伊達駅前」「河爺湖温泉」行き「北黄金貝塚公園前」下車 (約5分)
- 伊達駅 (JR室蘭本線) から
 車で約20分
- 道南バス「室蘭港」行き「北黄金貝塚公園前」下車 (約20分)
- 室蘭IC (道央自動車道) から
 車で約10分

大船遺跡

- 函館駅 (JR函館本線) から
 車で約70分
- 函館バス「鹿部」「古部」「楡法華」行き「大船小学校前」下車 (約100分)
 徒歩で約10分 ※「古部」「楡法華」行きは、南茅部支所前で要乗換
- 新函館北斗駅 (JR北海道新幹線) から
 大沼公園IC (道央自動車道) から
 車で約45分 (大沼経由)
- 函館空港から
 車で約50分
- 函館市縄文文化交流センター、垣ノ島遺跡から
 車で約10分

入江貝塚

- 洞爺駅 (JR室蘭本線) から
 徒歩で約15分
- 虹田洞爺湖IC (道央自動車道) から
 車で約10分

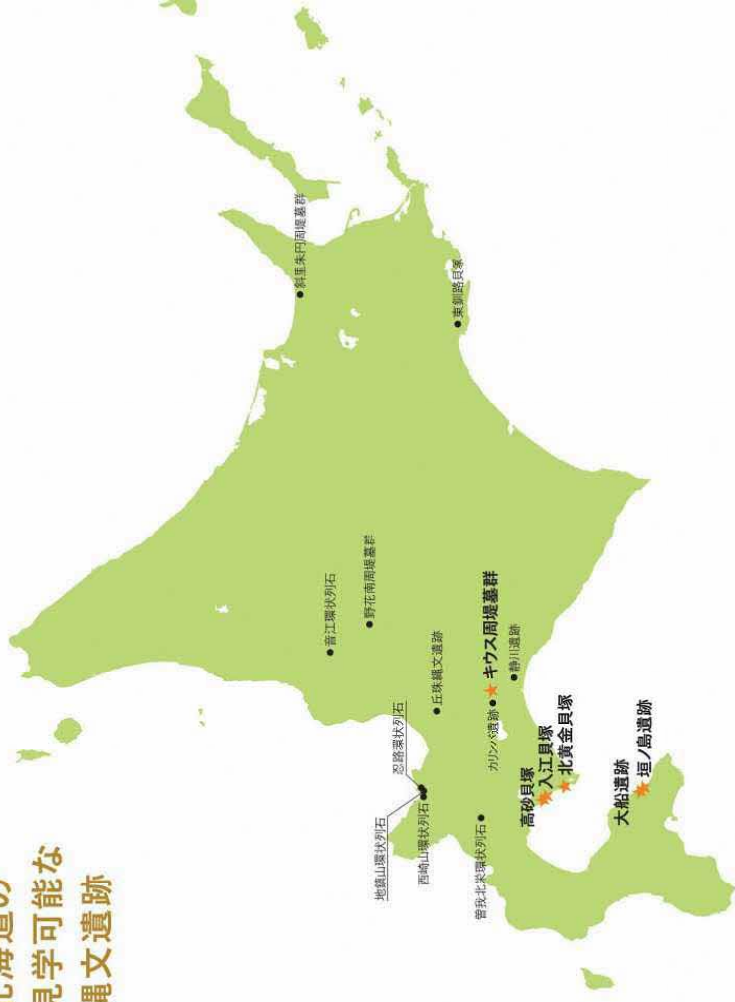
キウス周堤墓群

- 長都駅 (JR千歳線) から
 車で約15分
- 千歳車IC (道東自動車道) から
 車で約2分
- 千歳駅 (JR千歳線) から
 千歳市縄文文化財センターから
 車で約10分

高砂貝塚

- 洞爺駅 (JR室蘭本線) から
 徒歩で約15分
- 虹田洞爺湖IC (道央自動車道) から
 車で約10分
- 森駅 (JR函館本線) から
 車で約5分
- 森IC (道央自動車道) から
 車で約2分

北海道の 見学可能な 縄文遺跡



遺跡名	所在地	お問い合わせ先
★入江貝塚	虹田洞爺湖町入江	入江、高砂貝塚館 0142-76-5802
★大船遺跡	函館市大船町	函館市縄文文化交流センター 0138-25-2030
★垣ノ島遺跡	函館市日尻町	函館市縄文文化交流センター 0138-25-2030
★キウス周堤墓群	千歳市中央	千歳市縄文文化財センター 0123-24-4210
★北黄金貝塚	伊達市北黄金町	北黄金貝塚情報センター 0142-24-2122
★高砂貝塚	虹田洞爺湖町高砂町	入江、高砂貝塚館 0142-76-5802
●丘塚縄文遺跡	札幌市東区丘塚町 574 番地 2 他	札幌市縄文文化財センター 011-512-5430
●忍路環状列石	小樽市忍路 2 丁目	小樽市教育委員会縄文遺跡学習室 / 小樽市総合博物館縄文室 1134-32-4111 / 0134-22-1258
●菅江環状列石	深川市菅江町字向嶋 174 番地 1	深川市教育委員会生涯学習スポーツ課 0164-26-2343
●カシノ遺跡	恵庭市黄金中央 5 丁目 216 - 7 はか	恵庭市教育委員会教育課 郷土資料館 0123-37-1288
●静川遺跡	苫小牧市字静川 93 番地 7 ~ 11	苫小牧市教育委員会生涯学習課 0144-32-6752
●地盤山環状列石	小樽市忍路 2 丁目	小樽市教育委員会教育課生涯学習課 0134-32-4111
●斜里宋田周堤墓群	斜里郡斜里町宋田西 76 番地	斜里町知味博物館 0152-23-1256
●曾我北環状列石	虹田洞爺湖町字曾我 252 番地 5	ニエコ町教育委員会市民学習課 0136-44-2034
●西崎山環状列石	余市郡余市町深町 551	余市水産博物館 0135-22-6187
●野花南周堤墓群	芦別市野花町 3256 番地	星の降る丘百年記念館 01242-4-2121
●東刺路貝塚	釧路市塚丁目 11	釧路市縄文文化財調査センター 0154-43-0739

★ 世界文化遺産に登録された北海道の縄文遺跡群 (五十音順)

掲出写真提供一覧

(掲出順／複数枚併用の場合はまとめて明記)

《6～11ページ 縄文時代の概要》

北海道埋蔵文化財センター
函館市縄文文化交流センター
北海道

函館市教育委員会
市立函館博物館
一戸町教育委員会
八戸市博物館

JOMON ARCHIVES (三内丸山遺跡センター所蔵)

八戸市埋蔵文化センター 是川縄文館
青森県立郷土館

《12～18ページ 北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産としての価値》

JOMON ARCHIVES (各地域教育委員会等)

《19～49ページ 北海道の構成資産・関連資産》

函館市教育委員会
伊達市教育委員会
洞爺湖町教育委員会
函館市南茅部支所
千歳市教育委員会
森町教育委員会
JOMON ARCHIVES (北海道各地域教育委員会等)
NEXCO 東日本

《48～49ページ 北東北の構成資産・関連資産》

JOMON ARCHIVES (北東北各地域教育委員会等)

《50～54ページ 世界遺産をガイドするために》

公益社団法人北海道観光振興機構
平泉町

《56～57ページ 縄文遺跡群を守り、活用するために》

JOMON ARCHIVES

伊達市教育委員会
函館市教育委員会
千歳市教育委員会

《58ページ 縄文時代以降の北海道の歴史》

北海道立北方民族博物館
星の降る里百年記念館
江別市郷土資料館
オホーツクミュージアムえさし
ところ遺跡の館

参考サイト

北海道・北東北の縄文遺跡群 (公式 HP)

<https://jomon-japan.jp/>



世界遺産登録推進書

<https://jomon-japan.jp/archives/asset/18881>



北海道の歴史・文化 AKARENGA

<https://www.akarenga-h.jp/hokkaido/jomon/j-02/>



北海道 縄文世界遺産推進室

<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/bns/jomon/index.html>



〈発行〉

北海道 環境生活部 文化局文化振興課 縄文世界遺産推進室

〒060-8588 札幌市中央区北3条西6丁目 TEL: 011-204-5168

〈協力〉

函館市教育委員会、千歳市教育委員会、伊達市教育委員会、洞爺湖町教育委員会、森町教育委員会

